出雲市矢野遺跡の研究（I）

田中義昭[※]・西尾克己[※※]・広江耕史[※※※]・山本　清[※※※※]・磯田由紀子[※※※※※]

Study of Yano site in Izumo City (I)

Yoshiaki TANAKA, Katsumi NISHIO, Koushi HIROE, Kiyoshi YAMAMOTO and Yukiko ISOTA

I 緒　　言

出雲地方における原始・古代集落研究はようやくその緒についたばかりである．山丘が低地に迫り，平坦な低丘陵がほとんどみられない宍道地溝帯の周縁では沖積平野の微高地が主要な集落造営地として選定されたらしい．そうした場所は大量の河川堆積物に覆われて集落址の発見がきわめて困難となる．

しかし近年河川改修や道路建設等で沖積平野から大規模な集落遺跡が検出されるようになった．松江市西川津遺跡，同市布田遺跡等の発見によって出雲地方における集落遺跡のあり方がようやく具体的に捉えられるようになってきた．

一方1984年，85年の両年にわたって斐川町荒神谷遺跡から銅鐸，銅矛，銅剣の大量発見があり，大変なセンセーションを巻き起こした．これら青銅器群を保有した地域集団がどこでどのような形で形成され，発展したのかといった問題の解明は，青銅器の大量出土という事態を考えるうえでも欠かせないことである．

以上のような現状認識にたって，われわれは出雲地方における原始・古代集落の実相，なかんずく弥生時代・古墳時代の集落遺跡の分布と構造及びその地域的特性の把握を主題とする研究に早急に取り組む必要を痛感するに至った．そこで出雲地方において原始・古代集落址研究のフィールドとして比較的恵まれた条件を備えている出雲市矢野遺跡を対象として，まずはこの遺跡の調査研究を手掛けることとした．また調査研究主体としては課題の大きさからしてより広範で持続性が求められるところから共同研究として推進するために「出雲平野集落遺跡研究会」を組織して当たることになった．

第一次調査は1985年11月に実施したが，本稿はその調査報告と若干の検討結果についての記載である．なお付編として矢野遺跡研究の嚆矢となった1953年の発掘調査に関する概報と，その際の出土品で現在島根大学考古学研究室に保管されている土器の紹介を行なうことにした．当該年度の調査記録と出土遺物

※　法文学部考古学研究室
※※　島根県教育庁文化課主事
※※※　島根県教育文化財団文化財主事
※※※※　島根大学名誉教授
※※※※※　法文学部考古学専攻生

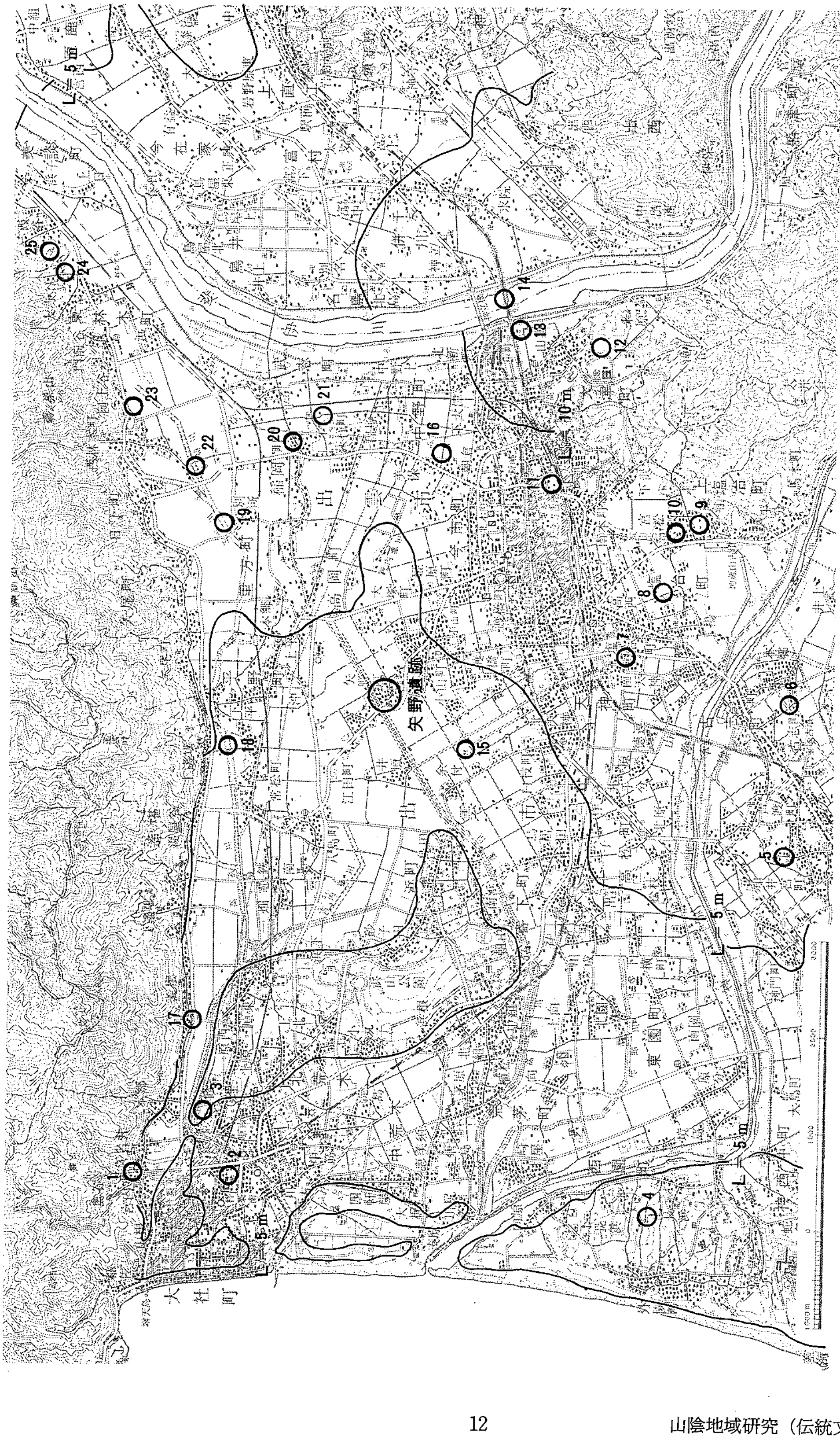


図1　矢野遺跡と周辺の主要遺跡

1．大社境内遺跡　2．鹿蔵山遺跡　3．原山遺跡　4．上長浜貝塚　5．知井宮多聞院遺跡　6．田畑遺跡　7．天神遺跡　8．神門寺境内廃寺　9．上塩冶築山古墳　10．宮松遺跡　11．大念寺古墳　12．西谷墳墓群　13．石土手遺跡　14．斐伊川鉄橋遺跡　15．白枝荒神屋敷遺跡16．大蔵遺跡　17．菱根遺跡　18．高浜川遺跡　19．里方別所遺跡　20．稲岡遺跡　21．荻杼古墓　22．山持川川岸遺跡　23．龍善寺東遺跡　24．大寺谷遺跡　25．大寺古墳

に関する記載の収録に当たっては島根大学名誉教授山本清先生の御配意を得たことを特記する．

II　矢野遺跡とその周辺

1．地理的・歴史的環境

島根半島と中国山地に挟まれた出雲平野は，中国山地より北流する斐伊川・神戸川の沖積作用で形成された大規模な平野であり，現在，斐伊川は宍道湖へ，神戸川は日本海に注ぐ．

平野の西側には浜山砂丘が，さらにその外側に日本海がある．一方東側には宍道湖が位置する．この様な景観が形成されたのは江戸時代以降である．それ以前には平野西部の浜山砂丘と四絡遺跡群の間には，「神門水海」(現在は縮少し，神西湖となっている）と呼ばれる潟湖が相当の広い水域を有し，また東側の宍道湖も簸川郡斐川町直江付近まで入り込んでおり，平野は今と比べるとかなり小さなものであった．さらに，斐伊川・神戸川は共に西流し，前述の「神門水海」に注いでいたのである．

縄文時代は出雲平野の形成期にあたり，平野の大部分は生活の舞台とはなり得なかった．現在知られている遺跡としては，北山山麓の簸川郡大社町にある菱根遺跡や大社境内遺跡等，数カ所が挙げられる．

一方，弥生時代に入ると，斐伊川・神戸川流域の微高地をはじめ，砂丘上や丘陵縁辺部に多くの集落が発生し，周囲の湿地帯を水田として開発していったと考えられている．前期のものとしては，大社町原山遺跡や矢野遺跡等が確認されている．これらからは，縄文時代後・晩期の土器が表面採集されており，集落の成立がその時期まで溯る可能性がある．なお，原山遺跡においては埋葬遺構としての配石墓が知られており，その遺物の中には北部九州からの直接的な伝播を窺わせる土器群も認められ[1]，遺跡の立地などを含めて当地方における弥生文化成立を考える上で注目すべきものである．

その後暫くは，前述のもの以外に集落の増加は認められない．それが弥生時代中期から後期にかけては，本遺跡を拠点として神門水海周辺に，新たに天神遺跡・知井宮多聞院遺跡・田畑遺跡が出現する．この時期の集落の増加には，農業技術の進歩と沖積作用による可耕地の拡大が考えられる．しかし，集落内に貝塚をもつものもあり，稲作に生活基盤を置きながらも，未だに日本海や「神門水海」での漁撈に少なからず依存しなければならなかった当時の不安定な生活を如実に示している．

さて，原山遺跡の北側に所在する命主神社境内からは，中広形銅戈と硬玉製匂玉が[2]，また斐川町荒神谷遺跡からは大量の中細形銅剣と，銅鐸，銅矛が出土している[3]．これはいうまでもなく，祭祀に関わる集落間の結合を物語り，また，他地域との文化交流をあらわす資料でもある．一方，埋葬遺構としては天神遺跡の中期の壺棺[4]と，矢野遺跡の後期の土壙墓が知られている．矢野遺跡の土壙墓からは後期前半の土器と共に，付近から細身のメノウ製管玉数個が出土している[5]．この頃，壺棺で葬られたり，貴重な玉類を副葬できる者が各集落の中に出現しており，社会階層の分化を想定させる．

後期も後半に至ると平野の中央部，斐伊川が山あいから平野部に注ぎ込む大津町の低丘陵上に，6基の四隅突出形墳丘墓を含む17基の墳墓からなる西谷墳墓群が築造される[6]．うち長辺40mを越える大形の四隅突出形墳丘墓

である３号墓，４号墓からは，矢野遺跡第３地点出土のものとほぼ同時期の特殊壺形土器，特殊器台形土器が出土している．このことは，出雲平野の中で，吉備の首長層と密接な関係を持ちつつ，各集落を統率する首長層が出現したことを意味する．なお，同種の土器は矢野遺跡第３地点からも発見されており[7]，両者の関係が注目されるが，第３地点の性格は不明である．今後の調査に期待したい．

一方，古墳時代に入ってからも継続する集落は多いが，低湿地に存在するものの中には消滅するものも認められ，一時的な海水準の変化などが要因と思われる．この時期に属する古墳はあまり知られていない．古いものとしては，全長52mの前方後円墳で竪穴式石室を内部主体とする大寺古墳や，径24mの円墳で礫床をもつ箱式石棺と木棺の３個の主体部からなる山地古墳が存在する．特に後者からは，筒形銅器２個と仿製鏡２面等が出土している[8]．これに続くものとしては平野の縁辺部の荒神谷遺跡付近の軍原古墳（長持形石棺をもつ）や，神庭岩船古墳（全長約57mの前方後円墳で舟形石棺をもつ）などが挙げられる．

その後，中期から後期に至って再び集落が増加・拡大し，平野の微高地や山麓に多くの遺跡が知られている．これを可能にしたものは，鉄製農具の普及と土木技術の進歩に伴う灌漑施設の発展が考えられる．

これに呼応するが如く，後期に属する古墳や横穴は丘陵縁辺部に多数分布している[9]．著名な古墳には，神戸川下流域の大念寺古墳（全長92mの前方後円墳，横穴式石室，家形石棺２）と上塩冶築山古墳（径約40mの円墳，横穴式石室，家形石棺２）があり，出雲地方を代表するものである．

なお，律令時代の出雲平野は，斐伊川を挟んで東，南側が出雲国出雲郡に，西，南側が同国神門郡に属していた．奈良時代の地形や郷の区分等は733年（天平５）に編纂された『出雲国風土記』に詳しい．因に，四絡地区は神門郡八野郷に当たり，西流する出雲大川（今の斐伊川）の南側に位置，その西方には神門水海が広がっていたのである．

２．四絡遺跡群について

四絡地区は大塚町，矢野町，小山町，渡橋町からなり，出雲平野のほぼ中央部に当たっている．遺跡は大塚町，矢野町，小山町に所在し，周知の遺跡としては，大塚遺跡，矢野遺跡，八野神社付近遺跡，四絡小学校付近遺跡などが知られる．その規模は東西１km・南北1.2kmにわたり，出土品から縄文時代後・晩期より奈良・平安時代に至るものである．

これらの遺跡群は周囲の水田面より約１m高い神戸川の旧自然堤防上に位置しており，現在宅地や畑地となっている微高地の全域が遺跡と考えられる．そこで便宜上，遺物の散布状況を基準として矢野町を５カ所，小山町を３カ所に区分し，矢野第１～５地点，小山第１～３地点と呼称している．（第２図参照）なお，四絡地区一帯は前述の如く『出雲国風土記』に載る神門郡八野郷に比定されている．

３．四絡遺跡群の研究史

四絡遺跡群が知られたのは戦後のことである．1948年の山本清氏による大塚町所在の大塚遺跡に関する報告[10]が契機となり，やがてその西方の小山第３地点から弥生土器や土師器の出土が確認されるにいたった[11]．さらに，矢野町の八野神社付近所在の矢野第２地点でも弥生前期の土器が大谷従二氏等により採集され[12]この一連の発見によって出雲平野中央部にあたる四絡地区にも弥生時代前期から奈良時代に及ぶ大形の集落が営まれ続けたことが裏

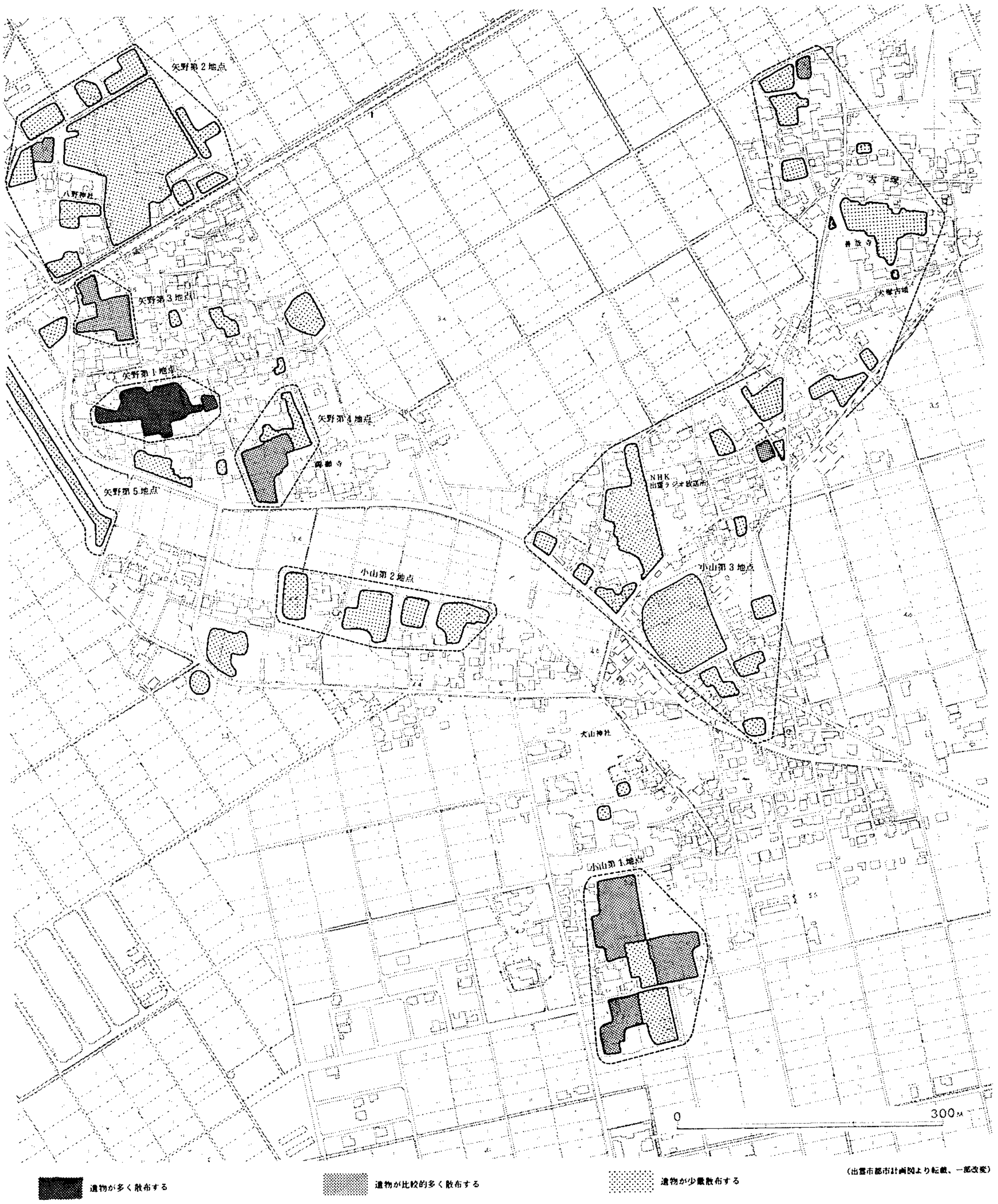


図2　四絡遺跡群の分布図

づけられたのである．

1953年には山本清氏を中心とする島根考古学会により，矢野遺跡第１地点（当時矢野貝塚と呼ばれていた．）の畑地で小規模な発掘が行なわれた．この発掘調査により弥生時代のヤマトシジミを主体とする貝塚の存在が確認

され，出土品としては土器，石器，骨角器等があり，なかでも弥生土器が多く，山陰における弥生時代の土器編年を進める上で好資料を提供することとなった[13]．これ以後，矢野貝塚は出雲市知井宮町の多聞院貝塚とともに弥生時代の数少ない貝塚として出雲平野の代表的遺跡の一つとなっている．

1970年代に入り，前述の発掘地点の隣接地が養豚用の糞尿処理場として使用されることになった．その際かなりの範囲が掘り起こされ，多量の土器や石器が出土し注目を受けた．また，1971年から1973年にかけても処理穴掘りに先行して地元有志により調査が行なわれ，次のような成果が得られた．調査面積は限られていたが，細身のメノウ製管玉や弥生後期前半の土器を伴う土壙墓等が検出され，遺構の保存状況もかなり良好であることが明らかになった[14]．

その後，出雲考古学研究会によって四絡遺跡群の綿密な分布調査が実施され，遺跡の広がりと遺物の散布密度をあらわした詳細な遺跡地図が作成されたのである．また，矢野遺跡第３地点からは吉備地方を中心に出土する特殊器台，特殊壺の破片も採集されており，弥生後期の首長墓の存在と平野における中心的集落の可能性を示唆する資料となっている[15]．

四絡地区は1980年前後から開発の波が徐々に押し寄せ，一帯の住宅地化が進みつつある．出雲平野集落遺跡研究会が発足した1986年には矢野遺跡の２カ所で出雲市教育委員会により事前調査が実施されている．その原因は個人の住宅建設と市道の拡張に関るものである．

この様に現状では遺跡のある畑地は住宅街へと変わりつつあり，四絡遺跡の総合的な調査と保存対策が緊急に必要となっている．

III　第１次調査

１．経緯と概要

矢野遺跡をどのような仕方で調査するかはなかなか困難な問題である．遺跡の範囲がきわめて広いこと，長期にわたって集落が継続的に営まれているので遺構の状態が相当複雑であろうと予測されること，加えて人家が集中しており，発掘調査がさまざまな形で制約を受けざるをえないといった問題点が存在するからである．

われわれは数度の検討会を行なって調査の目的・性格を，今後の矢野遺跡の研究方向も睨みながら明確にすることに務めた．その結果，第一次調査は以後の調査の試掘的なものとして実施し，矢野遺跡の基本的層序を確認すること，住居址等の遺存状況を把握することなどを課題とすることとした．

このような性格の発掘調査を行なうとすれば，調査地点の内容がある程度判明していることが必要となる．そのような条件を備えている個所はいうまでもなく矢野第１地点を置いてほかにはない．すでに1953年にトレンチ発掘が行なわれており，大把みな層序と出土遺物が明らかにされている[16]．とくに貝層の存在が基本的な層位と土器の伴出関係を探るうえで大きな期待をもたせた．また1973年の調査では弥生時代後期の土壙が発見されており[17]，将来この時期の居住域と墓域の関係を明らかにするための手掛かりがえられる可能性もある．

さらに矢野第１地点は，調査可能な範囲が遺跡中最大であって，このことも一つの魅力であるが，それ以上に重要なことは，ここが遺跡の中心部を占め，散布土器量もひじょうに多いことから文字通り集落の中心部に当た

ると推定されることである．このような点からしても第1地点を発掘対象地に選ぶことには理があったわけである．

われわれは地元での共同研究者の一人である川上稔氏や出雲市教育委員会の今岡清氏等に御尽力いただき，町内会において調査の意義の説明と協力方の依頼を数度お願いした．また土地所有者の方とも数回接触して了解を得ることに務めたが，条件が折り合わず他日を期す以外にないということになった．

降雪期前に調査を遂行したいと考えていたわれわれは，上記のような事情によって第1地点の調査が困難であるならば別地点を改めて物色せざるをえないと判断し，その選定方を今岡・川上両氏にお願いした．矢野第2地点を調査地とした経緯の主要な部分は以上の通りである．

八野神社参道東側の畑地は宮司宇田川氏の厚意で，また神社裏の桑畑の一角は吾郷征三氏の了解が得られて発掘が実現したものである．この矢野第2地点は矢野遺跡の北西端に当たり，以前に大社考古学会の大谷従二氏が弥生時代前期の壺形土器を採集され，1950年頃には地元研究者による小規模な発掘が行なわれたとも伝えられている．表採土器片には弥生土器，土師器，須恵器等の破片がみられ，須恵器片には奈良時代頃のものと思われるものが含まれていた.[18)]

八野神社の前方にはかって標高3m強の微高地が広がっていたが，県道建設の際に地下げされて現在は水田になっている．水田周辺の地下げ断面からは弥生時代前期の土器片や奈良・平安時代の須恵器片が採集された．

このようにしてわれわれは矢野第2地点の西側の一部に発掘の鍬を入れることになったのであるが，第1地点を試掘するということで設定した課題はこの際一応棚上げせざるをえず，まさに「矢野遺跡を調査する」という一点で成果を挙げるよう努力するほかはなかった．

発掘調査は10月31日から開始し，11月16日まで実施した．途中雨天等により作業中止を余儀なくされた日もあり，実労日数は12日である．発掘地点は先に示した神社参道東側と宮司宇田川氏宅裏の畑地である．前者をA地点，後者をB地点と仮称しておく．

トレンチの設定は，予めB地点に永久杭（座標系番号III，X＝－68,907.403，Y＝52,217.903，H＝3.322，図3の⑩点）を打ち，これを直接起点として，この点を通る南北ラインに沿ってトレンチの一辺を決めるか，あるいはこれを基準に南北方向に併行線をとってそれを一辺とするかの方法によった．B地点のトレンチは基準線を西壁にとり，A地点のトレンチは基準線の西12mの南北ラインを東壁として設けた．これは矢野遺跡をはじめ四絡遺跡群を将来にわたって調査する際に個別調査地点を遺跡群の全体図に正確に位置づけて記録することが必要と思われたのでそのためにとられた措置である．

トレンチの発掘は必ずしも順調とはいえなかった．すでにこの頃から強い西風が吹き，それが作業進行の妨げになった．そうした自然条件もさることながら土層と遺構の複雑な遺存状態がわれわれを悩ませた．

A地点トレンチ（将来の全面調査を予測してIトレンチとする）では耕土（表土）下に固い褐色～黒褐色土が堆積しており，その上部には中世，近世初の遺物と柱穴状の陥込，小規模な溝状遺構数条が検出された．また黒褐色土層の下部では隅丸方形状の竪穴住居址の一角とそれにともなう柱穴群が発見された．

最下部は粗い砂層であるが，その上面を浅く掘り込むような形で黒褐色土が堆積し，一部には焼土や炭化物が認められるなどから人為の地層として黒褐色土層を検討することの必要性が感じられた．この層の下部では古式土師器の比較的大きな破片が出土している．また層中からは弥生時代前期の土器片や須恵器片も検出されている．

B地点トレンチ（呼称はA地点同様）は桑畝の間に設けたのでトレンチ調査による地層・地形把握といった課題は大きく制約された．ここでは耕土（表土）下に薄い黒褐色の遺物包含層があり，その下部は黄灰色で多量の鉄分を含む粘土層となっている．この層で

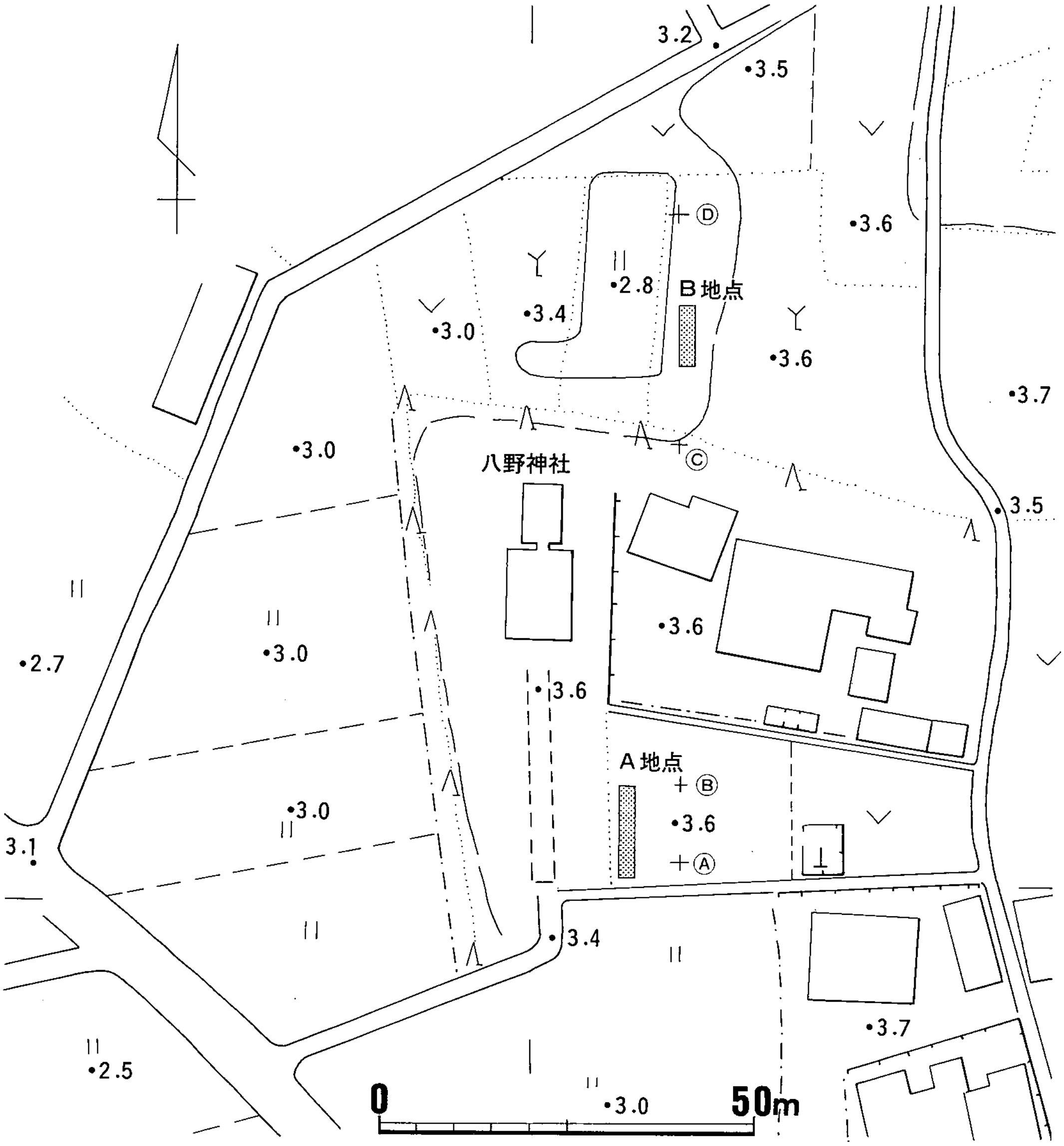
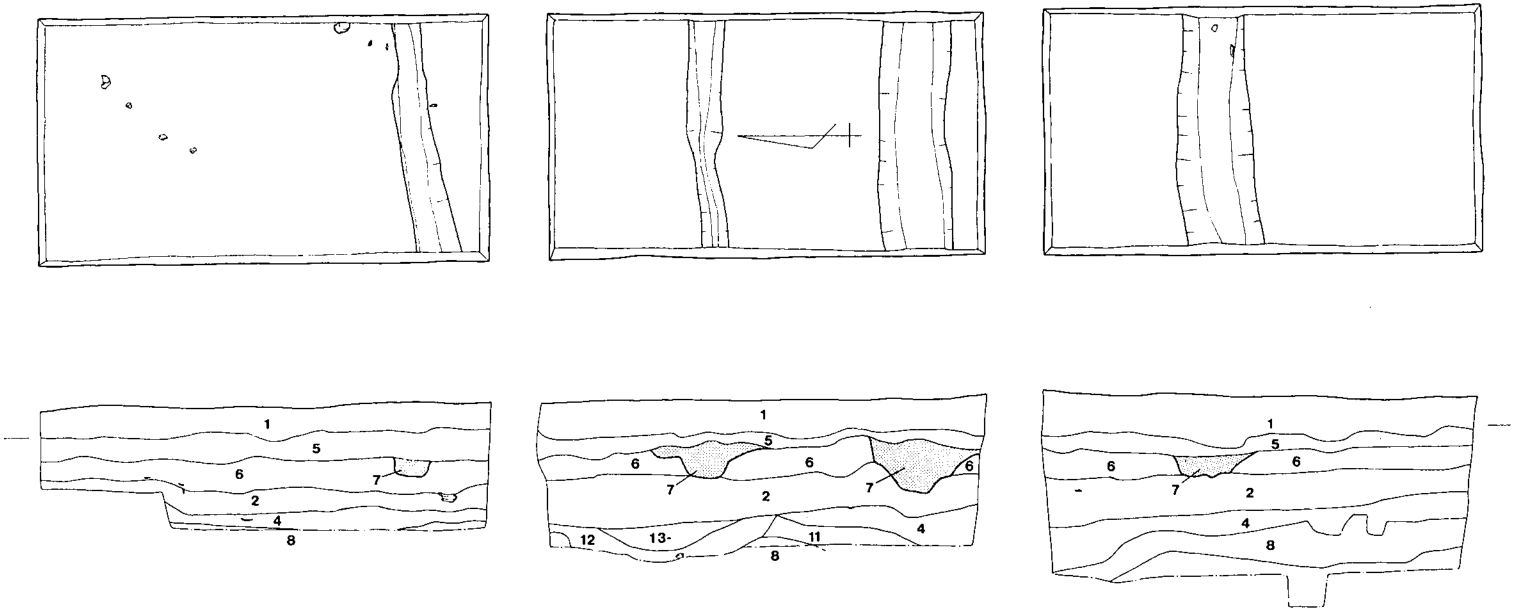


図3　矢野遺跡第2地点調査区配置図
（Ⓓ点＝永久杭位置　Ⓐ～Ⓒ＝真北方向基準杭位置）



1	暗茶褐色土（耕作土）	7	やや暗い暗褐色土（溝状遺構）
2	黒褐色土	8	灰褐色砂層
4	やや暗い黒褐色砂質土	11	暗黒褐色砂質土層
5	暗黄褐色土	12	黒色砂質土層
6	暗褐色土	13	炭化物を含む黒褐色砂質土層

図4　A地点第Ⅰトレンチ断面（東壁）図及び溝状遺構（褐色土層）分布図

は多数のピットが検出されたが，まとまった遺構としては捉え切れなかった．出土遺物としては古式土師器がわずかに認められたほかは須恵器片が多く，中世陶器も１点発見されている．

以上第一次調査実施に至る経緯と調査の概要を述べた．

２．A地点の調査

１）Ｉトレンチの概観

Ｉトレンチは八野神社参道東側の畑地に設けた．磁北から6°30″東へ振ったラインを基準に南北12m東西２mのトレンチとした．さらにトレンチ内を３区に分かち，区間には幅50cmの土手を残した．各区の名称は南から１区２区，３区とする．

Ｉトレンチの各壁の観察から確認できる基本的な層序は，最上層から順に耕作土（１層)，暗黄褐色土（５層)，暗褐色土（６層)，黒褐色土（２層)，暗黒褐色砂質土（４層）となり，その下部に灰褐色土（８層）が認められた．最下層は砂層となる．５層から４層までは弥生時代から近世に至る遺物を包含する層である．これらの各層は10cm～30cmほどの厚さで堆積している．最下層・砂層は厚さ１m以上あると思われ，20cmぐらい掘り下げると湧水が出てくる．

Ｉトレンチ内で検出された遺構とその層序は以下の通りである．すなわち１区，３区に各１本，２区に２本の東西方向にはしる溝状の遺構がある．これらはすべて黒褐色土（２層）の上面に掘り込まれている．次に各区においては，暗黒褐色砂質土（４層）の下部に数カ所の陥込が認められた．これらの陥込の小規模なものはいわゆる柱穴状のピットとしてよいが，やや広範囲のものは単なるピットではなく，住居址の可能性がある．また２区においては，炭化物を含む焼けた砂層が確認されており，炉址的な遺構ではないかと考えられた．

３区においては，確実に住居址の一部とみられるような，大きな陥込とそれにともなうピットが検出されている．

２）各区のセクションと遺構について

(a)　１区の層序は，最上部から耕作土（１層)，暗黄褐色土（５層)，暗褐色土（６層)，黒褐色土（２層)，暗黒褐色砂質土（４層)，灰褐色砂（８層）となっている．セクションにあらわれた遺構としては，６層に掘りこまれた溝状遺構（７層）と，４層が８層を切り込むような形で示される大きな陥込の部分およびピット状遺構が確認されている．

各遺構についてやや詳しく述べると，溝状

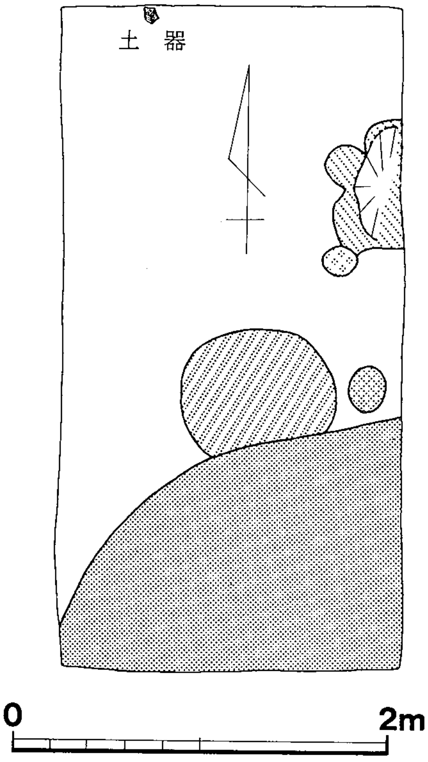


図５　A地点第Ｉトレンチ２区砂層上面の遺構分布図

遺構は6層と同じレベルに存在する．幅は上端で60cm，下端で40cm，また確認された深さは15cmほどである．ほぼ東西方向に掘られているが，西へ行くにしたがい若干南へ曲がるようである．この遺構の上層の5層では，主として近世の陶器，磁器が含まれている．この遺構からも同様な遺物が出土しており，おそらく近世の遺構と考えられるが，その性格については不明である．

最後に，4層の陥込とピットについてみると，ここからは古墳時代前半の土師器が出土しているので，陥込及びピット状遺構の時期もこの土器によって決定されることになる．これらの遺構は，あるいは住居址とその柱穴である可能性もあるが明確なことは言えない．最下層の8層からは，凹線，円形竹管文と貝殻腹縁による刺突文を施した土器片（弥生時代後期初頭か）が出土している．

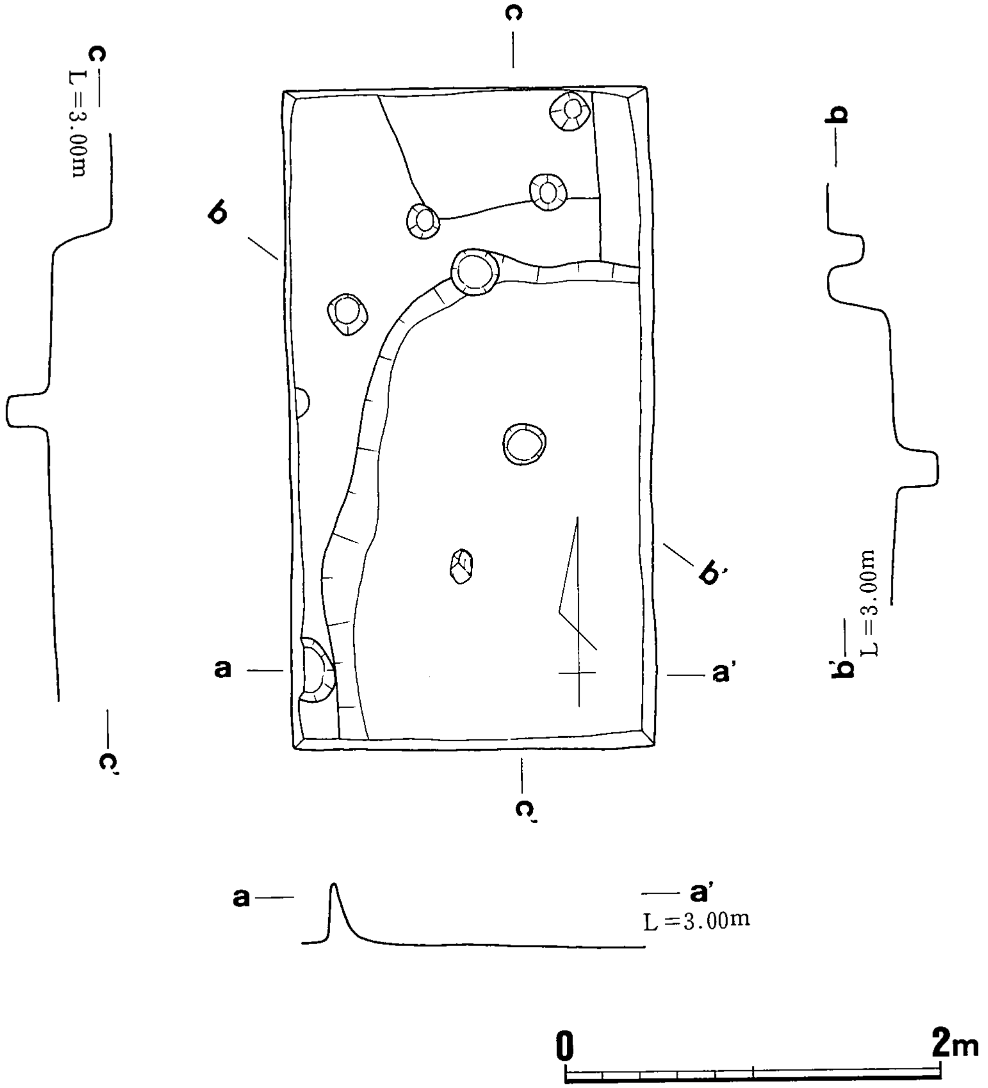


図6　A地点第Iトレンチ3区の竪穴住居址実測図

(b)　2区の層序は，耕作土（1層）から黒褐色土（2層）までは1区とほぼ同じであるが，それより下部は砂質土などが，複雑な切り合い関係を見せている．セクション観察によると，2層の下に暗黒褐色土（4層），その下に暗黒褐色砂（11層），さらにその下に灰褐色砂（8層）という層序になっている．そして，この4層と11層を切って黒色砂質土（12層）が擂鉢状に堆積し，さらにこの12層を切り込むような形で黒褐色砂（13層）が浅い皿状に重なっている．

遺構としては，5層の下に6層を掘り込んだ溝状の遺構が2本検出されている．2本ともほぼ東西方向に走り，そのうち南側のものは上端の幅が約60cm，下端の幅が約30cm，深さ約20cm，もう一本は上端幅約30cm，下端幅約10cm，深さ10cmを測る．これらも性格は不明であるが，時期的には出土遺物から近世のものと考えられる．

また2層では，さして深いものではないが，陥込が検出されている．住居址としては掘込が浅すぎるので，なお性格は良くわからない．4層は南側へ向かって陥込んでいくが，これは1区で確認されたものとの関連で理解する必要があろう．2層についても同様のことが言える．遺物は2層，11層からはそれぞれ古式土師器が出土している．

なお，13層には炭化物が含まれており，炉址の一部である可能性も考えられる．層序関係から13層の時期は古墳時代以降中世以前といえるだろう．また12層からは弥生時代前期の甕形土器の破片が出土しているが，11層を切り込んでいるところからすればこの層もまた古墳時代以降のものということになる．

(c)　3区の層序は1区とほぼ同じである．他の二つの区でみられた溝状遺構がこの区でも1本検出されている．上端の幅約20cm～30cm，下端幅約20cmで，方向は東西よりわずかに南北へふれている．この遺構は各区のそれと同様なレベルにあり，同じ層に掘り込まれてもいるので，四本を関連づけて捉えることが必要であろう．

3区では，竪穴住居址の約四分の一が遺構として検出された．標高約3.1mに平坦面があり，そこから30cmほど掘り込んで床面を設けていた．平坦面から床面にかけての上層はかなり固くなっているが，このことは床面の直下が砂層であることと関連があろう．床面を人為的により強く固めた可能性もある．この住居址にともなうピットは8穴検出されている．すなわち床面に1穴，床面から上部の平坦面に至る傾斜面に1穴，平坦面に6穴の計8穴で，いずれもこの住居址にともなう柱穴と考えられる．

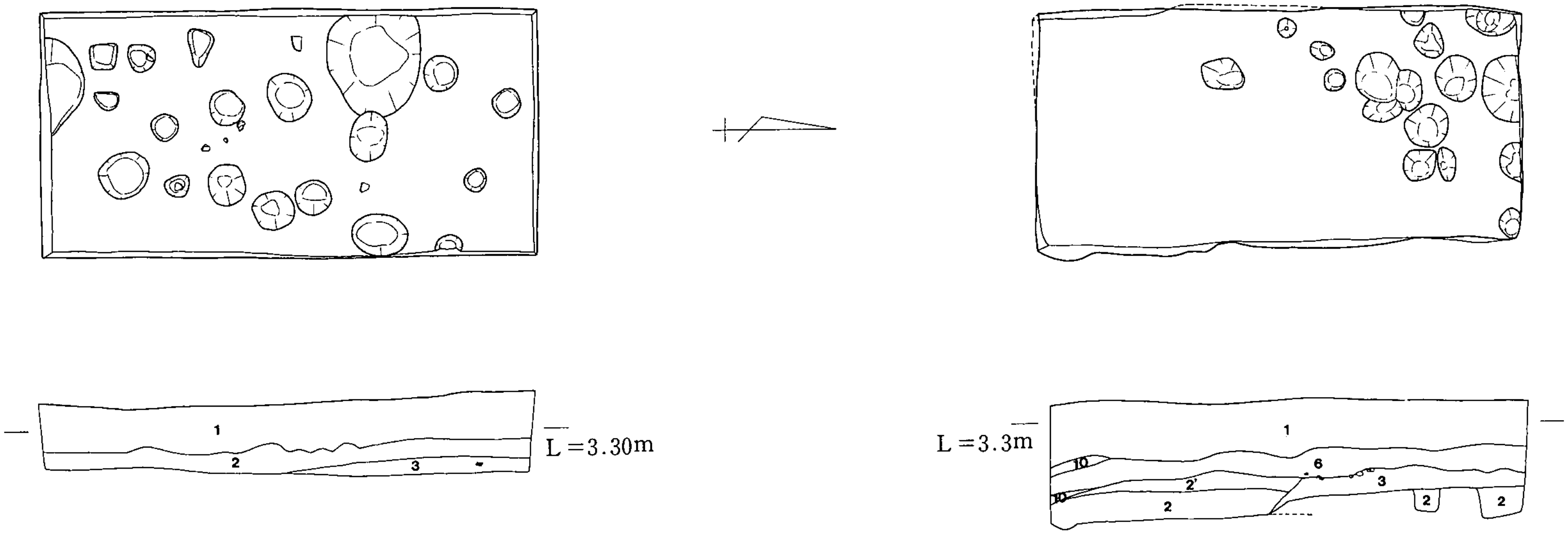
住居址床面上からは遺物は発見されなかったが，床面を覆った層（4層，2層）から古式土師器片が出土していることから考えると所属時期は古墳時代の初頭頃になると考えられる．2区で確認された炉址様の遺構が層序的にみて同時期のものと判断されるので，これとの関連が当然考えられよう．

3．B地点の調査

1）Iトレンチの概観

Iトレンチは八野神社の裏，A地点で設定した南北ラインに沿ってA地点Iトレンチ3区の端より北へ55mの畑地中に設けた．トレンチの規模は南北4m，東西2mのもの2本を，間に4mの間隔を置いて設定した．各区の名称は南側から1区，2区とする．

B地点における基本的層序は大まかにいって以下の5つに分かれる．上から順に耕作土（1層），暗褐色土（6層），黒褐色土（2



1　暗茶褐色土
2　黒褐色土
2′ 暗黒褐色の粒子がすくない
3　ややあかるい黒褐色土層
6　暗褐色土
10　暗黒褐色砂質土層

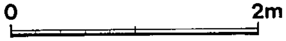


図7　B地点第Ⅰトレンチ、1・2区遺構分布状態と断面図（西壁）

層），やや明るい黒褐色土（３層），黄褐色土（18層）となる．また18層の下には粗い砂の層があり，２区の一部ではこの砂層の直上に粘土層の存在することが確認された．２層，３層，18層では土層中に鉄分がかたまった褐色の粒子が多く含まれ，固くしまっていた．以上が，Ｂ地点の基本的層序であるが，１区，２区においては若干の相違も見られるので，それらを念頭に各区の概要を述べる．

２）各区のセクションと遺構について

(a)　１区の層序は耕作土（１層）で厚さ約40cm，黒褐色土（２層）厚さ約16cm，やや明るい黒褐色土（３層）厚さ約16cm，黄褐色土（18層）の順で認められる．

この区ではＡ地点とＢ地点２区で見られた暗褐色土（６層）は存在しないが，これはあるいは耕作時に掘り返されて失われた可能性がある．18層は２，３層によって覆われている．

２，３層には遺構は認められず，全般に細かい土器片を含むのみであった．しかし３層には少量ながら比較的大きな土師器片が含まれていた．

北に向けて若干傾斜する18層には径約10～40cm，深さ10～15cm程度のピットが18個掘り込まれている．ピットの中には18層下の砂層に達するものもあるが，多くは形態が碗状を成し，深さも比較的浅いものがほとんどであって，柱穴のような遺構とは考えにくい．またこれらのピットに確実に伴う遺物は検出できなかったため，その時期，性格ともに不明とせざるをえない．

１区の主な遺物としては，古墳時代中頃の坩などがある．

(b)　２区の層序は基本的には１区とほぼ同じであるが，１区では見られなかった厚さ約20cmの暗褐色土（６層）が耕作土層の下部に続いている．６層の上，下部には暗灰褐色粘質土（10層）が８cmの厚さで一部で確認された．

セクションを見る限りでは，３層の陥込に２・２′層が堆積し，また３層の上に円礫が敷かれた形になっているが，円礫の分布はごく一部に限られており，また土色の不明瞭さから，遺構としてとらえることができなかった．

18層は多数のピットが掘られた，いわば基盤層ともいうべきものであるが，２区においてはトレンチ全面に広がらずに，北半分の範囲に少し内湾した形で確認された．18層はプランで見た場合，その端部に行くにつれ色も薄く，土質も軟かいシルト状へと変化していく．18層の確認されなかった個所には粘土層の堆積がみられた．それら18層，粘土層の下には粗い砂の層がある．

遺構としては６層と地山に掘られたピット群がある．６層のものは径16cm，深さ15cmの大きさで，２個ある．ほぼ同じレベルで中世の土師質土器かと思われる坏形土器が口縁部を下にした状態で検出されたが，ピットの時代決定の直接的な資料とは認めがたく，性格も不明である．

18層に掘られたピットは全部で17個あり，形状，大きさともに様ざまで，１区で検出されたものと形状が似ている．これらのピットは先に述べたシルト質粘土層の堆積した個所には存在せず，基盤層の18層に沿うような状態で掘られていることから，滞水地に対する土止めのためのものとも考えられるが，断定はできない．時期も不明である．

主な遺物として，古墳時代中期の土師器高坏，奈良時代の須恵器短頸壺，中世の土師質坏形土器などがある．

4．出土遺物

1）Ａ地点

第８図１～５は甕である．１は，口縁部端を欠き，外面に段を有し，内外面にハケメが施されている．２，３，４は，外面に一条の沈線を持つ．５は，外面に三条のヘラ描沈線を入れ内外面ハケメを施す．６は，壺で外面の上段に斜格子文，一条の沈線を間に入れ下段に無軸の羽状文を描いている．内面にはヘラミガキを施している．１～４，６は，弥生時代前期前葉，５は前期後葉に含まれる．

７は，甕で口縁部が「く」の字に屈曲し，体部に丸味をもつ．８，９は，底部で外面にハケメを施す．７は，中期中葉，８，９は，中期に属す．10，11は甕で，口縁が開き気味に立ち上がり，下端部が斜め下方に突出する．口縁内外面にヨコナデを施す．11は，口縁が直立気味に立ち上がり，外面に沈線を入れた後を一部ナデて消している．12は，甕の口縁部から頸部にかけての破片と思われる．外面上段に円形の刺突文，その下に貝殻腹縁による刺突文と三条の平行沈線を施している．これらは，後期後葉に含まれると思われる．

13～16は，壺で複合口縁をなしている．13は，口縁がやや外反し，端部に平坦面を有す．頸部外面には，沈線を入れその上下に羽状文を入れる．14は，口縁が内傾し，やや厚みをもち，下端部は外方へ長く突出している．頸部外面に羽状文を施す．15は，頸部の破片で，外面に羽状文を有す．16は，口縁が外反して立ち上がり，下端部は外方へ短く突出している．18，20は，鼓形器台，19は，低脚坏である．

これらは，古墳時代前期（藤田編年Ｖ期[19]）に含まれる．17は，高坏で坏部途中で屈曲し，外方へ向け突出している．内面にヘラミガキを施す．弥生時代後期後葉に含まれる．21は，甕で口縁部は複合口縁が簡略された形となっている．22は，高坏でヘラミガキを施している．これらは，古墳時代中期に含まれる．23は，甕，24は，高坏である．時期は，21，22よりやや下ると思われる．

25，26は，奈良時代の須恵器と思われる．28は，中世の土師質土器の底部で回転糸切りにより切り離している．31～33は，いずれも表面採集品の高坏である．時期は古墳時代中期と推定される．

2）Ｂ地点

34は，低脚坏の脚部である．35は，小形丸底壺で内外面に指頭圧痕が残る．36，37は，高坏である．34が古墳時代前期，35～37は，中期に含まれる．38は，甕で口縁は短く外反する．39，40は，須恵器の坏，41は坏の蓋で古墳時代後期（山本編年Ⅳ期[20]）である．42は，短頸壺である．奈良時代のものと思われる．43，44は，中世の土師質土器である．

Ａ地点から出土した遺物は，弥生時代，古墳時代，奈良時代，中世といった長期にわたっている．その中でも，Ａ地点Ｉトレンチ３区からは竪穴住居址の一部が確認されたこともあり，それにともなうと考えられる古墳時代前期の遺物が多数を占めている．

Ｂ地点出土の遺物は，古墳時代以降の遺物であり，Ａ地点のように古墳時代前期の遺物が主流を占めるのとは対照的である．

5．矢野遺跡第２地点出土陶器

八野神社Ａ地点Ｉトレンチ３区，褐色土上層中から出土した陶器皿は唐津焼皿であろう．胎土は鉄分を含んでおり，削り出しで竹節状の高台周辺は無釉で茶褐色を呈している．外面上半から内面には白刷目が回してあり，そ

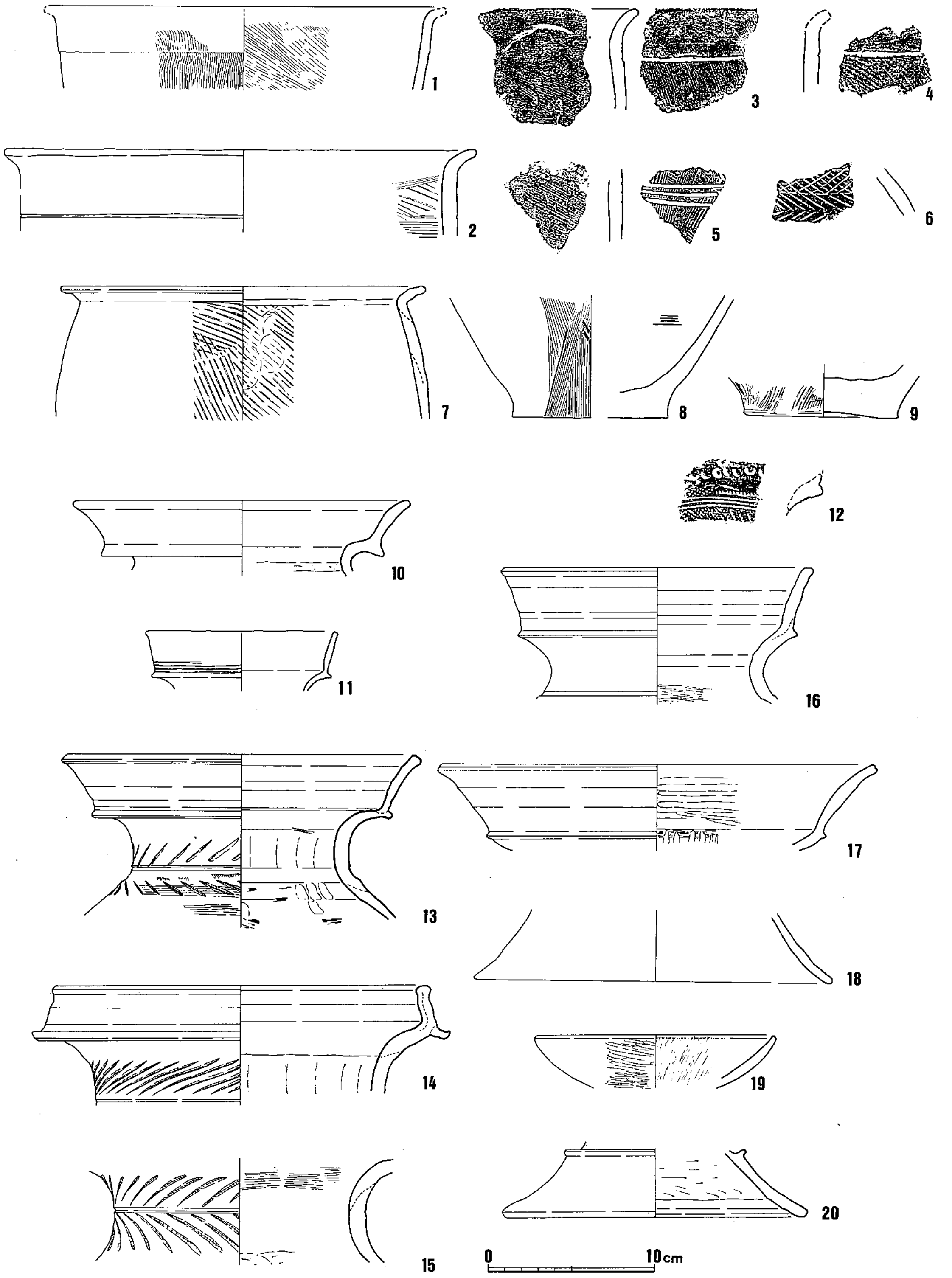


図８　矢野遺跡第２地点出土土器実測図（１）

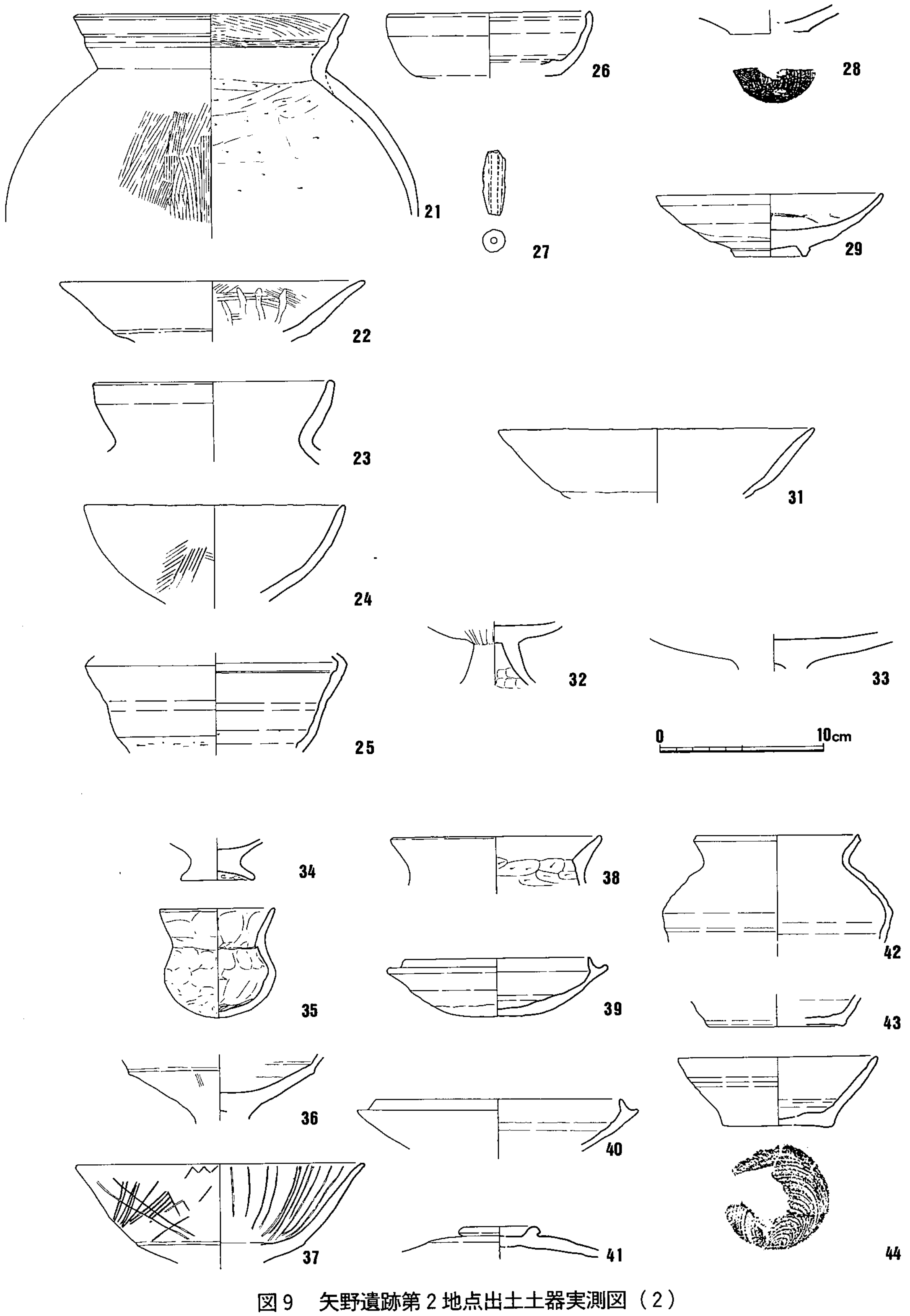


図９　矢野遺跡第２地点出土土器実測図（２）

矢野遺跡第2地点出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1.	甕	(24.3)			外面は口縁部下にタテのハケを施し，ハケによる小さな段を有する．内面はナナメのハケを施す．	内－褐色 外－黒くススける．	3㎜以下の砂粒を含む．	良好	
2.	甕	(30.2)			外面は一条のヘラガキ沈線がめぐり，薄い擦痕を有す．内面は細いヨコのハケと粗いナナメのハケを施す．	黄土色	粗い粒砂含まず．	普通	
3.	甕				口縁部外面は横ナデ頸部以下はナナメ方向のハケメ後沈線が1条入る．内面は口縁部横ナデそれ以下は4条（?）のハケメが入る．	黄灰色	長石，石英，雲母を含み，1㎜程度の砂粒を含む．	良好	
4.	甕				外面はヘラ状工具による1条の沈線がめぐる．口縁部下はハケメ後丁寧なヨコナデ．沈線下はナナメのハケメ，後軽いナデ．内面は剝離が著しい．使用によるものか？	黄褐色	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む．	〃	
5.	甕				外面は3条のヘラ状工具による沈線がめぐり，ナナメのハケメからタテ方向に近いハケメが施されている．内面はナナメのハケメが施されている．	内－白褐色 外－黒色(黒斑部分)	1㎜以下の砂粒を多く含む．	〃	
6.	壺				外面は1条の沈線がめぐり，沈線の上側はヘラガキ沈線による斜格子文，沈線の下側はヘラガキ（無軸）羽状文を施す．内面はヘラミガキ．	白黄色	3㎜以下の砂粒を多く含む．	〃	
7.	壺	(21.9)			外面はナナメのハケメが重なり合い，内面はナナメのハケメを施す．	淡黄褐色	1㎜前後の石英，長石の粒を多く含む．	〃	
8.									
9.	底部		19.3		外面はタテの粗いハケメ．内面はナデ．底部はナデ．	黄褐色土層	1㎜大の長石，石英を多く含む．	良好	
10.	壺				外面は3条の沈線がめぐり，沈線の上側は二枚貝腹縁による連続刺突文，沈線の下側は一部二枚貝腹縁による刺突文，刺突文の下側は竹管状工具による刺突文（スタンプ文）を施す．	灰褐色	1㎜以下の砂を多く含む．	〃	

挿図番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
11.	甕	(11.5)			口縁部は浅い櫛ガキ沈線を施したのち上半部のみ横ナデしたものと思われる．口縁下半部に沈線が3～4本確認できる．	赤褐色	雲母，径1㎜程度の砂粒を含む．	良好	
12.	甕	(20.3)			口縁部はヨコナデ．頸部内側はヘラケズリ．	明黄褐色	砂粒多い．	〃	
13.	壺	21.8	—	—	口縁はやや外反する．頸部は中位でほぼ直線をなしてゆるやかに外反する．口縁部は内外面ともヨコナデ．胴部は外面はタテハケのちヨコハケ，内面はヘラケズリ．頸部外面にハケメ原体による有軸羽状文を有す．	淡赤褐色	やや疎．1㎜以下の石英，雲母を多く含む．	〃	
14.	壺	22.8	—	—	口縁はやや内傾し，端部は肥厚する．頸部はゆるやかに外反し，屈曲部は斜め下方に伸び突帯状となる．口縁は内外面ともヨコナデ．頸部内面はナデ．頸部外面に13と同様な有軸羽状文を有す．	赤褐色	やや疎．1㎜以下の石英，雲母を多く含む．	普通	
15.	壺	—	—	—	口縁を欠く．頸部は外反し，内面はヨコハケ後ナデ．外面は13と同様な有軸羽状文を有す．	淡黄褐色	ふつう．1㎜以下の石英，雲母を含む．	〃	
16.	甕	18.8	—	—	口縁はやや外反し，上端，下端とも外方へ突出する．頸部は湾曲し，胴部との境に1条の沈線を有す．口縁は内外面ともヨコナデ．頸部内面はハケメ，胴部はヘラケズリ．	黄褐色	やや疎．1㎜以下の石英・雲母を多く含む．	〃	
17.	高坏	26.6	—	—	坏部は外面の突出部より屈曲し，口縁はゆるやかに外反し，端部に1条の沈線を有す．外面はヨコナデ．内面は口縁付近はヨコ方向のヘラミガキ，以下はタテ方向のヘラミガキ．	外：桃白色 内：灰～暗灰色	密．砂粒を多く含む．	良好	
18.	器台	18.5	—	—	坏部は欠く．脚部はやや外反し開き，筒部との境にある突出部は斜上方へ伸びる．内面はヘラケズリ，外面はヨコナデ．	黄白色	密．雲母，長石を含む．	〃	
19.	低脚坏	14.5	—	—	口縁にかけて内湾ぎみに広がり，端部はわずかに内側に屈曲ぎみにおさめる．内面はタテ方向，外面はヨコ方向のヘラミガキ．	内：黄白色 外：白茶色	密．1㎜以下の砂粒を含む．	〃	
20.	器台	—	21.4	—	脚部はゆるやかに外反し広がる．内面はヘラケズリと思われる．	黄土色	茶褐色砂粒，雲母粒を含む．	〃	

挿図番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
21.	甕	16.8			口縁部は外傾し，外面に1条の横線を有し，複合口縁の退化した形状となっている．口縁端部は平坦面を有す．胴部は内湾しながら広がる．胴部外面はタテ方向のハケメ，内面はヘラケズリ．胴上部から口縁部外面は，ヨコナデ．口縁上部内面はヨコ方向のハケメ．下部はナデ．	淡黄褐色	やや疎	良好	
22.	高坏	18.6			坏部は段を有し口縁にかけてゆるやかに外反気味に開く．外面はヨコナデ，内面はヨコ方向のハケメのちヘラミガキ．	黄白色	密．砂粒多く含む．	〃	
23.	甕	14.8			単純口縁であるが，口縁部外面口唇部下に僅かに稜を残す．調整は内外面ともヨコナデ．	明茶色	密	〃	
24.	高坏	15.8			坏部．口縁部にかけてやや内湾する．内縁部ヨコナデ，外面荒いハケメ，内面ヘラミガキ．	淡黄褐色	0.5㎜大の砂粒を含む．	〃	外面赤色顔料塗布・内面黒斑あり．
25.	坏	12.4	8.8	(4.0)	体部から口縁部にかけてやや内湾する．平底か．内外ともヨコナデ．	暗青色	密	〃	
26.	壺				体部に鋭い稜をもつ．外面下部ヘラケズリ，他はヨコナデ．	〃	〃	〃	肩部に自然釉あり．
27.	土錘	長さ 4.0	径 0.7〜1.4	口径 0.4	細身で管玉状を呈す．表面には手捏ね状の凹凸が残る．	赤褐色	〃	〃	黒斑あり．
28.	坏		4.8		体部は底部との境を明瞭にし大きく開く．底部は回転糸切り．体部ヨコナデ．	明茶褐色	〃	〃	
29.	高坏	19.2			坏部に稜の痕跡を残し，口縁にかけてほぼまっすぐに広がっている．外面ヨコナデ，内面荒いハケメ後ヨコナデ．	淡黄褐色	〃	〃	外面に黒斑あり．
30.	高坏				口縁を欠く．「ハ」の字状に広がる脚部をもつ．坏部は内外面ともヘラミガキ．脚部はタテ方向のハケメ後ヘラミガキ．	〃	〃	〃	
31.	高坏				坏底部のみ残存する．坏部外面に脚部との接合痕を残す．内面は平坦で，ハケメ後ヘラミガキ．外面はハケメ後ヘラミガキ．	断面：白褐色 内外面とも朱塗り．	1㎜以下の砂粒を含む．	〃	表採

挿図番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
32.	坩	10.1			口縁は外傾し口径が胴部最大径と等しい．手捏ねで，口縁部のみ粗いナデ．	橙褐色	細砂を多く含む．	良好	
33.	低脚坏		4.7		坏部はなだらかに広がり，脚部は「ハ」の字状に開く．坏部内面はヘラミガキ，脚部内面はヘラケズリ，外面は横ナデ．	淡黄褐色	径0.5～1㎜の石英，雲母を含む．	〃	
34.	高坏				坏部は逆「ハ」の字状に広がり，屈曲部外面に稜をもつ．脚部を欠く．内外面ともナデと思われるが，一部にハケメを残す．	黄白色	密	普通	
35.	高坏	17.7			坏部に段を有し，口縁にかけてほぼまっすぐ伸び，端部はわずかに外反する．内面は放射状に，外面は斜格子状に暗文状にヘラミガキを施す．内外面ともヨコナデ．	赤褐色（朱塗り）	〃	良好	
36.	甕	12.9			口縁部は外傾し，体部内面はヘラケズリ．口縁部内面，外面はヨコナデ．	灰白色 （内部黒灰色）	密．径2㎜前後の砂粒をわずかに含む．	〃	
37.	坏 （須恵器）	11.2		3.6	体部はゆるやかに広がり，受部は短く内傾気味に立ち上がる．底部外面はヘラ切り後ナデ，底部内面はナデ，他は回転ナデ．	灰白色	密で細砂多く含む．	〃	
38.	坏 （須恵器）	15.1			体部は逆「ハ」の字状に開き，受部は短かく内傾する．内外面とも回転ナデ．	灰白色	密	〃	
39.	蓋 （須恵器）				体部は大きく開き，輪状つまみを有す．内面はヨコナデ，つまみは装着後ヨコナデ，外面上部はヘラケズリ後ヨコナデ，下部はヨコナデ．	明灰色	密．砂粒を少量含む．	〃	つまみ径5.0cm
40.	短頸壺 （須恵器）	10.2			口縁部は短く外傾し，端部は浅い凹線状を成す．胴部は「ハ」の字状に広がり，最大径部で屈曲し，底部へ向かう．内外面とも回転ナデで，口縁部内面と胴部外面に自然釉が付着する．	内面：青灰色 外面：暗青色	密	〃	
41.	坏 （土師器）		8.2		底部は回転糸切りで，体部は直線的に伸び，内外面とも回転ナデ．	灰色	〃	〃	
42.	坏 （土師器）	12.2		4.2	底部はやや厚く回転糸切りで，体部は逆「ハ」の字状に開く．内外面とも口縁端部・底部付近はヨコナデ，中央部はロクロ痕をわずかに残す．	白褐色	全体に微砂粒を多く含む．	〃	

の上に透明釉がかかっている．

見込みには鏡のように円形にくぼんだ個所があるが，重ね焼きの沸えと目に使われた砂の痕跡で覆われている．

いわゆる刷毛目唐津は唐津焼の中でも遅れて出現する様式であるので江戸時代の前半頃の遺物と考え，下限についても大きな誤りはあるまい．

結　語

矢野遺跡の全面的調査に先立って，層序・遺構のあり方・土器の出土状況と型式等基本的事項確認のために計画した第一次調査であったが，第1地点の調査が実現せず，急拠第2地点の限られた個所を調査せざるを得なかった．ために当初に期待した成果はえられなかったのではあるが，なお注目すべき事実がいくつか知られたのでそれらをまず列記しよう．

<層序について>　A地点，B地点ともに表土と基盤層の間に褐色ないし黒（暗）褐色の遺物包含層を挟む土層構成を示しているが，A地点ではこの中間層中に中・近世の遺構が存在すること，そしてこの層がきわめて堅固であるという特徴に注意する必要があろう．川上稔氏の教示によると第1地点の南部でもこうした堅い中間層が存在するようであるからこの堅さが何に基因するのか突き止めなければならないであろう．あるいは，中間層と基盤の砂層とが不整合関係にあり，基盤層上面に少し喰い込む形で住居址状の遺構が存在するという事実は，基盤層の上面標高が2.5m前後という絶対レベルともあわせて今後の検討課題となろう．

B地点の場合は基盤層のレベルがA地点より少し高く，土質も青灰色ないし黄灰色の粘質土であるという違いが認められた．わずか100m程度北寄りでこうした相違がなぜあらわれるのか，この点も矢野微高地の変遷史を明らかにするうえでの課題としなければならないであろう．

<遺構について>　A地点では中間層上部で溝状遺構，下部で住居址の一部と住居址状の遺構が検出されて，A地点一帯が集落址となる可能性はきわめて濃厚である．B地点では発見の柱穴状遺構が建造物や居住区にともなうものとすれば，こちらも集落址の一角として認めうるのであるが，現状では確かなことはいえない．

いずれにしても今後の精査，とくに面的な発掘により一層一層で遺構の全体像を追求しながら時期や性格を確認する方向に調査を進めることになろう．

<出土遺物>　A地点では弥生土器，土師器，須恵器，中・近世の土器・陶器の出土をみた．弥生土器は前期のものの存在が注意をひく．周辺からも採集されているので第2地点の西側に弥生時代前期(おそらく前期後半)の集落址の存在が予測されるところである．

古式土師器は住居址または住居址状遺構の時期を示すと思われる．また中・近世の遺物は，この地点の集落の長い継続性を物語っているといえよう．

B地点では古式土師器や中世の遺物も認められるが，量的に多いのは須恵器である．これらの大部分は型式的な特徴をじゅうぶん明らかにしえない．しかし従来この付近で採集されている土器は古墳時代の終わり頃から奈良・平安時代にわたるものが多いという状況に照らしてみるとその傾向は伺えると思うのである．

小規模なトレンチ発掘での知見を項目的に

整理するとおよそ以上のようになろう．最後に第2地点を集落址としてみた場合現状でどのようなことがいえるのか，若干の推測も加えてこれを述べるならば以下のようになる．

第2地点が集落造営地として本格的に利用されるようになるのは弥生時代前期後半かと思われる．すでに第1地点でもこの時期の土器が出土しているので弥生時代前期後半には矢野微高地に複数の集団が居住していたと想定されるのである．そしておそらく弥生時代中期後葉から古墳時代前半期にかけて集落規模は大きくなり，古代集落としての盛期の一つが出現したのではないかと思われる．A地点の住居遺構はそうした集落動向の一部として理解しうるのではなかろうか．

B地点とその周辺地区における古墳時代末から奈良・平安時代の集落址の様相は，まだ不明の部分が多い．『出雲国風土記』にいう八野郷の所在，郷の構造等大方の関心をよぶ研究課題もあるが，すべては今後の調査に期して待つことになろう．

註1）村上　勇・川原和人　「出雲・原山遺跡の再検討一前期弥生土器を中心にして一」　『島根県立博物館調査報告』第2冊　1979年

2）近藤　正　「島根県下の青銅器について」『島根県文化財調査報告書』第二集　1966年

3）島根県教育委員会　『荒神谷遺跡一銅剣発掘調査概報一』1985年，島根県教育委員会『荒神谷遺跡発掘調査概報(2)一銅鐸・銅矛出土地一』1986年

4）出雲市教育委員会　『天神遺跡』　1977年

5）出雲考古学研究会　「出雲平野の集落遺跡II一矢野遺跡とその周辺一」　『古代の出雲を考える』5　1986年

6）出雲考古学研究会　「西谷墳墓群」　『古代の出雲を考える』2　1980年

7）出雲考古学研究会　「出雲市矢野遺跡出土の特殊器台形・壺形土器」　『八雲立つ風土記の丘』No.74　1985年

8）出雲市教育委員会　『山地古墳発掘調査報告書』　1986年

9）島根県教育委員会　『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』　1980年

10）山本　清　「出雲市大塚町土器散布地」『島根考古学』第2号　1948年

11）池田満雄　「四絡小学校付近出土土器」『出雲市の文化財』第1集　1956年

12）池田満雄　「矢野貝塚」『出雲市の文化財』第1集　1956年

13）山本　清　『島根県出雲市矢野町貝塚調査概報』　1957年

14）東森市良・西尾克己　「矢野遺跡」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980年

15）註5）に同じ

16）註13）に同じ

17）註5）に同じ

18）註5）に同じ　他に，1985年の出雲市教育委員会による，矢野遺跡第2地点でおこなわれた市道拡幅工事にともなう緊急調査の際に，これらが出土している．

19）藤田憲司　「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」　『考古学雑誌』64－4　1979年

20）山本　清　「山陰の須恵器」　『山陰古墳文化の研究』　1971年

あとがき

短期間の調査ではあるが，矢野遺跡の全体像の解明に向けての第一歩は印された．矢野の集落は長い歴史的な時間の経過のもとで現在もなお息吹いている．古代集落と現在の集

落の間に断絶がないように実感されるのである．出雲平野真直中の微高地はそうした意味で特別な意義をもっているといえよう．

※　本稿は以下のような執筆分担によって成ったものである．

Ⅰ　緒　　言　　田中義昭
Ⅱ　矢野遺跡とその周辺　　西尾克己
Ⅲ　第１次調査
　1　経緯と概要　　田中義昭
　2　Ａ地点の調査　宮本正保
　3　Ｂ地点の調査　佐藤雄史
　4　出土遺物　　　広江耕史，村上　勇，桑原真治
Ⅳ　結　　語　　田中義昭

付編Ⅰ　島根県出雲市矢野町貝塚調査概報　山本　清
付編Ⅱ　矢野貝塚出土の土器について　磯田由紀子
（表題には各項執筆代表者名のみを記した）

※　第一次調査は以下の諸氏の参加のもとで進められた．

吾郷和宏，赤沢秀則，磯田由紀子，今岡清，稲田信，遠藤浩巳，大谷晃二，角田徳幸，川上稔，雲井加恵，桑原真治，近藤哲雄，佐藤雄史，杉山（野々村）佐知子，高橋進一，田中義昭，手銭弘明，丹羽野裕，西尾克己，広江耕史，前中直紀，三輪奈津子，湊健一，宮本正保，村上勇（敬称略，アイウエオ順）

※　第一次調査出土遺物の整理は以下の諸氏によって行なわれた．

有富雪子，磯田由紀子，遠藤浩巳，岡本悦子，桑原真治，佐藤雄史，柴尾由美，新海正博，杉田ますみ，高橋進一，田中義昭，西尾克己，広江耕史，松尾晴司，松山智弘，宮本正保，村上勇

※　本稿作成のための図版整理・トレース・原稿清書等の編集作業は，執筆者の他以下の諸氏の協力があった．

有富雪子，大西貴子，岡本悦子，柴尾由美，新海正博，杉田ますみ，松尾晴司，松山智弘

※　付編Ⅰは，島根大学名誉教授山本清先生の御好意で再録させていただいたものである．

調査から報告に至る過程で御協力いただいた上記諸氏に文末を借りて厚くお礼を申し上げる．また土地所有者の宇田川氏，出雲市教育委員会，発掘作業協力者の鐘築・藤間・山崎の３氏，地元自治会の関係者の方がたにも大変お世話になった．記して謝意を表したい．

なお発掘調査の見学に来訪された島根県保険協会所属の医師と関係の方がたからは多額のカンパをいただいた．御厚意に深謝する次第である．

（田中義昭　記）

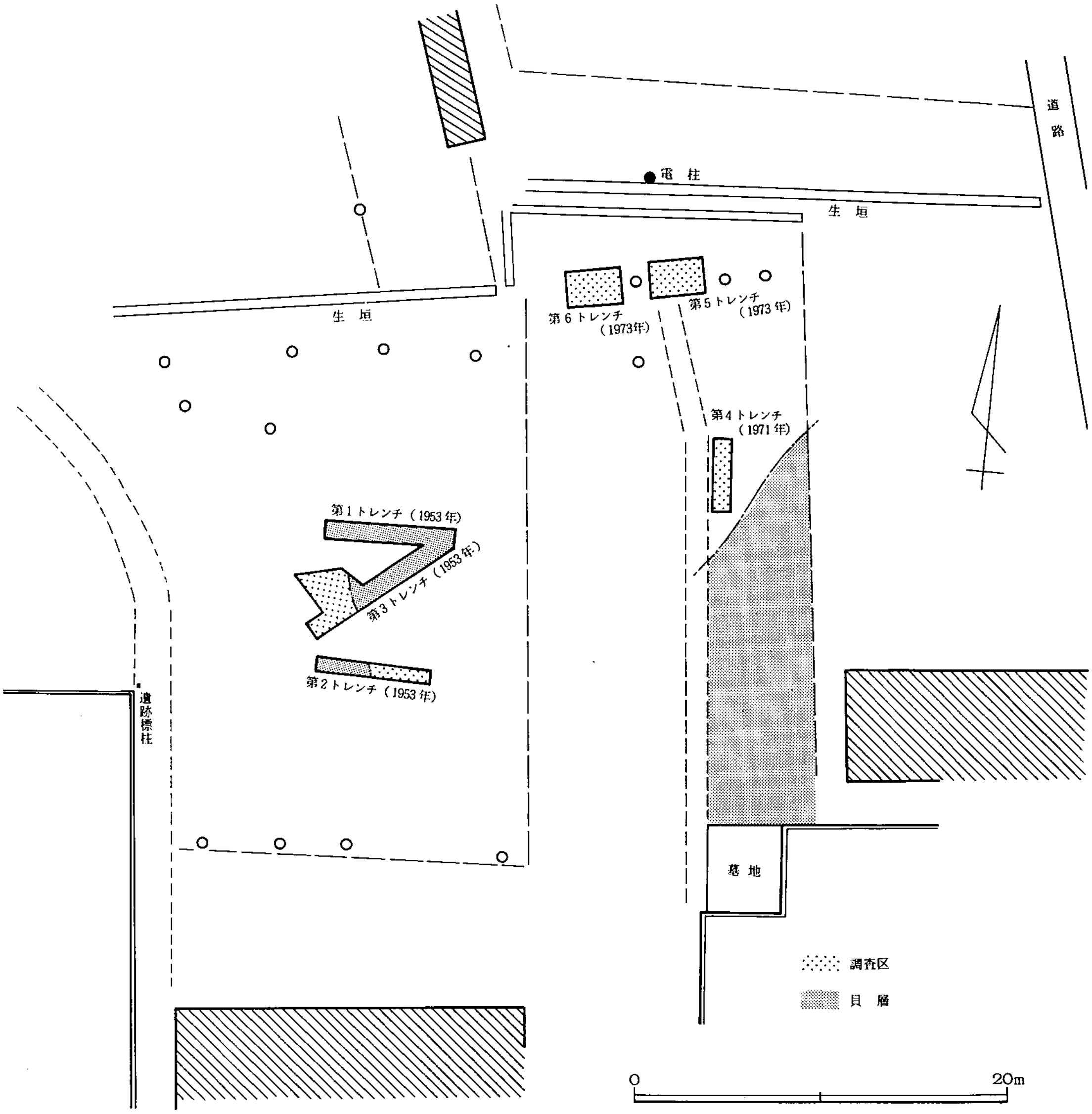
付編Ｉ

島根県出雲市矢野町貝塚発掘調査概報

山 本　　清

１．所　在　島根県出雲市矢野町344番地
（同地万代然一所有地）

２．調査の事情
主な目的はこの遺跡が将来相当規模の発掘



付編Ｉ図　矢野遺跡第Ｉ地点調査区（1953年～1973年）

調査に価するや否やを推定するための試掘を行うことであった．山陰地方でも近年相当数の弥生式遺跡が検出されたが組織的発掘調査は殆ど行われていない．この遺跡は遺物の散布も割に広く，地下の包含層の保存が良ければそうした調査の目的に叶う条件をもつように見えたのである．

次にこの遺跡のある簸川平野に関しては種々の歴史地理上の問題があるので，この発掘でそうした問題にも1つの拠り所を得たいということも目的の1つであった．

遺跡の発見の次第を要記すると，昭和22－3年頃筆者は矢野町に近い大塚町の集落の西南部に，土師器の出土したことを聞き，現地と遺物を調査し同方面に広く遺物の散布する事実を知ったが，後その西方に放送用アンテナの工事が行われ，そこにも遺物が出土して注意された．さらにその後，大谷従二，大国一雄氏等が矢野町の八野神社附近で弥生式土器の散布する事実を発見されたということで，美多實氏は今回発掘した地点に着目され，同氏が主となり発掘を計画することとなったのである．

発掘は畑の都合で昭和28年5，6月頃に行う予定であったが天候に災され延期して8月上旬にこれを実施したのである．この発掘は山本清，岩佐文子，美多實の3名が発掘者並に同担当者として事に当たり井上狷介，大谷従二，大国一雄，池田満雄，池橋達夫，金本正之氏等作業に参加してこれを援助せられた．

3．遺跡の立地

沖積地簸川平野の中にあり，北方に連る北山山脈の麓から約2㎞，矢野集落の西南隅に位する．この集落のある所は周囲の水田地帯に比し1m内外高く，発掘した地点はそうした宅地に囲まれた畑地で，径20mばかりの範囲に貝類土器片等が比較的多く散布している．

4．遺物包含層の状態

発掘地点としては，遺物散布が濃密で且つ作物の障りのない部分を選び，幅約1mのトレンチ三本を基幹として調査を行った．

〔第1トレンチ〕

一番北部に東西に長さ7mのものをとった．これを第1トレンチと名づける．地表は東端よりも西端が約15cm高くなっていて極緩い勾配がある．約30cmの深さの表土を除くと土砂の含有量の極めて少ない貝層があり，その下に黄色を帯びた土層，更にその下が砂層となり，砂層は少し下になると礫を混ずる．この砂層は大体地表面下90cm位から下にあり，この層からは多量の地下水が湧出する．さてこの砂層の上にある黄色土層はその上面即ち貝層に接する面に人為的な加工の痕を残し，高低不斉の部分多く（直径27cmばかりの柱穴様のものも1ケある）したがって貝層は薄い所で15cm・厚い所で43cmに及ぶ状態となっていた．

遺物は貝層及び黄色土層上面のみに限られ，貝はシジミが主体で少量のハマグリ等の鹹水産のものを混じえていた．

〔第2トレンチ〕

第1トレンチの南方に約6.8mを距てて，それと平行に長さ8mのものをとった．これを第2トレンチと名づける．このトレンチに於ても表土の厚さは20～30cmで，その下に遺物包含層があり，更にその下に砂礫層があること第1トレンチと同様であるが，その包含層の内容はやや異なり，西半は土を多く混じた貝層で東に行くにしたがって貝が少なく中央から東には殆ど貝はなく，第1トレンチの黄色土に似た土層中に土器其他の遺物を含んでいる．

〔第３トレンチ〕

第１トレンチの東端から第２トレンチの西端に向けてとり，これを第３トレンチと呼ぶ．これは貝層が第１トレンチと第２トレンチとの間でどのように変化するかを見ることを目標に，作物のある所を避けることをも顧慮して掘ったのである．表土の厚さは第１，第２と大体同様であるが，西南に行くにしたがって貝がまばらになる．よって西南端においてトレンチを若干西方に拡張したところ貝は殆どなく，柱穴状のものが１ケ検出され，まばらに遺物を含む層が連続していることがわかった．

以上のようであるのでこの試掘した地域は凡そ30cmの厚さの表土の下に20～40cmの，余り乱されていない遺物包含層のあることが明瞭になったのであり，したがってその周囲に相当広く認められる遺物散布地域も相似た状況にあることが推測されるに至った次第である．

５．発見遺物

包含層は上記のように比較的薄くその間に特殊な層位的な区別は認められず，また土器形式に於ても包含層の上部のものと下部のものとの間に差異は認められなかった．よって検出した遺物を一括して左に列挙することとする．

＜自然遺物＞

(1) 貝　類　ヤマトシジミが９割以上で主体をなし，ハマグリが多少目につく程度であったが，細かに云うと下記のような種類を含む．この鑑定は島根大学文理学部地学教室古生物学担当の西山教授をわずらわした．

Ａ．淡水産　①ヤマトシジミ　②イシガイ　③オイタニシ　④カワニナ

Ｂ．鹹水産　⑤サルボウ　⑥サトウガイ　⑦マガキ　⑧キハマグリ　⑨ヒナガイ　⑩イタヤガイ　⑪　チリメンボラ　⑫　サザエ　⑬テングニシ　⑭ワロアワビ

Ｃ．陸　産　⑮イヅモマイマイ

(2) 鹿　　角の断片１．顎骨片１．歯１．

(3) 人　骨　管状骨小片３．これは第２トレンチ東部から検出．

＜石器，骨角器＞

石器は鉄斧形のやや異形のものが一つと，石錘１ケ．黒耀石小片小量を検出しただけ．骨製尖頭器２，牙製の半製品１．

＜土器＞

総てはりんご箱２杯位採取したが，何れも小片ばかりで完形品は１もなく，また全形を察知出来る程度に復原出来るものも一つもなかった．

微量の前期の壺及甕の破片等が主に第１トレンチの東端に近い北側壁の附近から検出されたけれども，大部分は後期のもの及び土師器の初期に属するもので，中期のものも少ない．このことは，小面積の発掘ながら石器類の僅少であることとも当然照応するものと云ってよかろう．

付編II

矢野遺跡出土土器（1953年調査）について

磯　田　由紀子

昭和28(1953)年山本清氏ら島根考古学会により発掘調査が行なわれ，その際出土した土器で現在島根大学に保管，管理されているものについて，実測可能なものを取り上げこれを検討した．

a）壺形土器（1～8）(31～33)

1はゆるく外反する口縁で頸部には段をもつ．外面は丁寧にヘラミガキを施し内面はハケメ調整のあとヘラミガキを施す．弥生時代前期に位置づけられるものであろう．2～5はともに口縁部が朝顔形に大きくひらき，端部は上下に肥厚している．2は口縁部端部外面を櫛状工具による斜格子文，内面を波状沈線文で，3は内面にさらに押圧を加えた貼付突帯で飾る．4は口縁端部内面外面ともに凹線を施す．5は口縁端部外面に斜格子文，内面は刺突文を施す．2，3は弥生時代中期中葉に位置づけられ，4，5は凹線文の出現期のもので，装飾性の衰退からすれば2，3より後出するものかもしれない．6は，口縁は厚いつくりで，端部折り返し部に三条の凹線を施す．頸部は折れ曲がらず大きく曲線を描いて開き，内面は頸部以下ヘラケズリである．7については，口縁は「く」の字状に折れ，口縁端部は肥厚し外面に2本の凹線を施す．8については，ゆるく「く」の字状に折れ，口縁端部はまるくおさめ，ヨコナデ調整を行なう．6，7，8，ともに弥生時代後期初頭に位置づけられるものと思われる．

31，32，33は口縁部がたちあがり，外面に沈線を施している．

b）甕形土器（17～30）(35～45)

17は，口縁端部をわずかに外反させ，胴部はほぼ垂直に下り，胴の張りはない．頸部には五条のヘラ描き沈線をいれ，外面やや粗いハケメ調整を施している．胎土は砂粒を多く含み，ススで黒変している．弥生時代前期後半頃のものと考えられる．

18は口縁部が短かくゆるく外反し，胴の張りはなく，底部にむかってゆるやかにすぼまる形状を示す．口縁端部はヨコナデ調整のち稜をもたせている．器面は内外ともよく磨かれている．弥生時代前期のものであろう．

19は口縁部の外反度が大きくなったもので，胴もやや張る傾向をみせる．20は口縁は薄いつくりで，頸部が「く」の字状に折れる．21は断面が三角形を程する口縁で，上面は平坦面をなし，頸部には突帯を貼り付け，刻み目をつける．19は弥生時代前期中葉，20，21ともに弥生時代中期中葉のものと思われる．

22は口縁はわずかに肥厚し，頸部は「く」の字状に折れ，頸部に指頭圧痕文帯をつける．口縁端部にはハケメ原体で刻み目を施す．23，24，27は，頸部が「く」の字状に屈折し，口縁端部には二条の凹線を施す．25，26も同様の形態をもつが，口縁端部に刻み目を入れている．28，29，30も基本的には23，24，27と形態的には変わらないが，内面にヘラケズリがみられることからより後出するものかもしれない．30は口縁端部がより肥厚するもので

ある．以上の観察をまとめると弥生時代中期後葉に属するものとして22，23，24，27を，後期初頭に位置づけられるものとして28，29，30を示したい．

35は口縁部は複合口縁化しており，口縁は外面に，4本の沈線を施す．36～40はいずれも口縁部が複合口縁化しており，やや外反してたち上がる．口縁部外面には櫛あるいは貝殻による沈線をいれ，39，40は，その後，口縁上端部がヨコナデされ，沈線が消されている．35は藤田編年II期[1]，36～40は藤田編年のIII期[2]にあたるものである．

41は複合口縁下端部の突出はほとんどなく42は，複合口縁部上端部が上方に引き上げられるようになったもので，藤田編年IV期[3]に含まれるであろう．43は複合口縁部の上端に平坦面を持ち，下方の突出部は外方に向け突出する．44～45は突出部がかなり鈍くなるもので藤田編年のV期[4]に相当すると思われる．

c）器台形土器（34）

筒部外面ヘラミガキ，台部外面には櫛あるいは貝による沈線を施している．的場式併行（?）のものと考えられる．

9～16は弥生土器底部片である．9は丸い粘土をはりつけたような底をなし，外面は粗いハケメを施している．弥生時代前期のものと考えられる．10～14，16は弥生時代中期に，15は後期にそれぞれ位置づけられるものであろう．

1953年調査の際に出土した土器群については，東森市良氏が9型式に分類して編年する考えを発表しておられる[5]．それによると弥生時代前期を矢野I，II式に，同中期を矢野III，IV，V式に，同後期を矢野VI，VII式に，そして古式土師器を矢野VIII，IX式としている．

矢野I式については，これを明確に前期前半に位置づけるとする表現はみられないが，文の脈絡からみて壺形土器図1－1は矢野I式に含められるようである．

矢野遺跡第1地点出土のこれら弥生時代前期でもより古式の壺形土器については，別に村上勇・川原和人両氏が「出雲原山式土器」中に含め得ることを明らかにされている[6]．

東森氏による矢野II式については壺形土器の場合「口縁がゆるく外反し頸部に沈線をめぐらすもの」とされているが，未確認である．甕形土器の図2－17などは，矢野II式が弥生時代前期後半に比定されるならばそこに含まれることになろう．また矢野III式については「中期初頭の土器は甕形土器片一個」があるとされるがこの土器片についても未確認である．矢野遺跡においては弥生時代中期の初頭ないし前葉に比定される土器の出土量はきわめて少ない．この点は入念な分布調査等の結果においても同様な傾向が指摘されている[7]．

矢野III式とされるものは弥生時代中期中葉の土器群を指すと思われる．甕形土器の場合図2－22なども弥生時代中期中葉に位置づけられているが，本稿ではこの類は中期後葉の所産として扱った．

矢野IV式については，壺形土器の場合好例がないとされる．本稿でも図1－4，5などが凹線文出現期のものと判断したが，明解ではない．凹線文の発達と口縁端部の幅の増大，傾斜度の変化は，それぞれに対応する現象と考えられ，さらに内面へラケズリ技法の徹底度合とも併せて弥生時代中期後葉以降の土器群のより綿密な検討が必要かと思われる．

以上の問題は，東森氏の後期2型式区分についてもいえることである．後期の区分について本稿では主として藤田編年に拠ったのであるが，出土土器量がきわめて多く，かつ弥

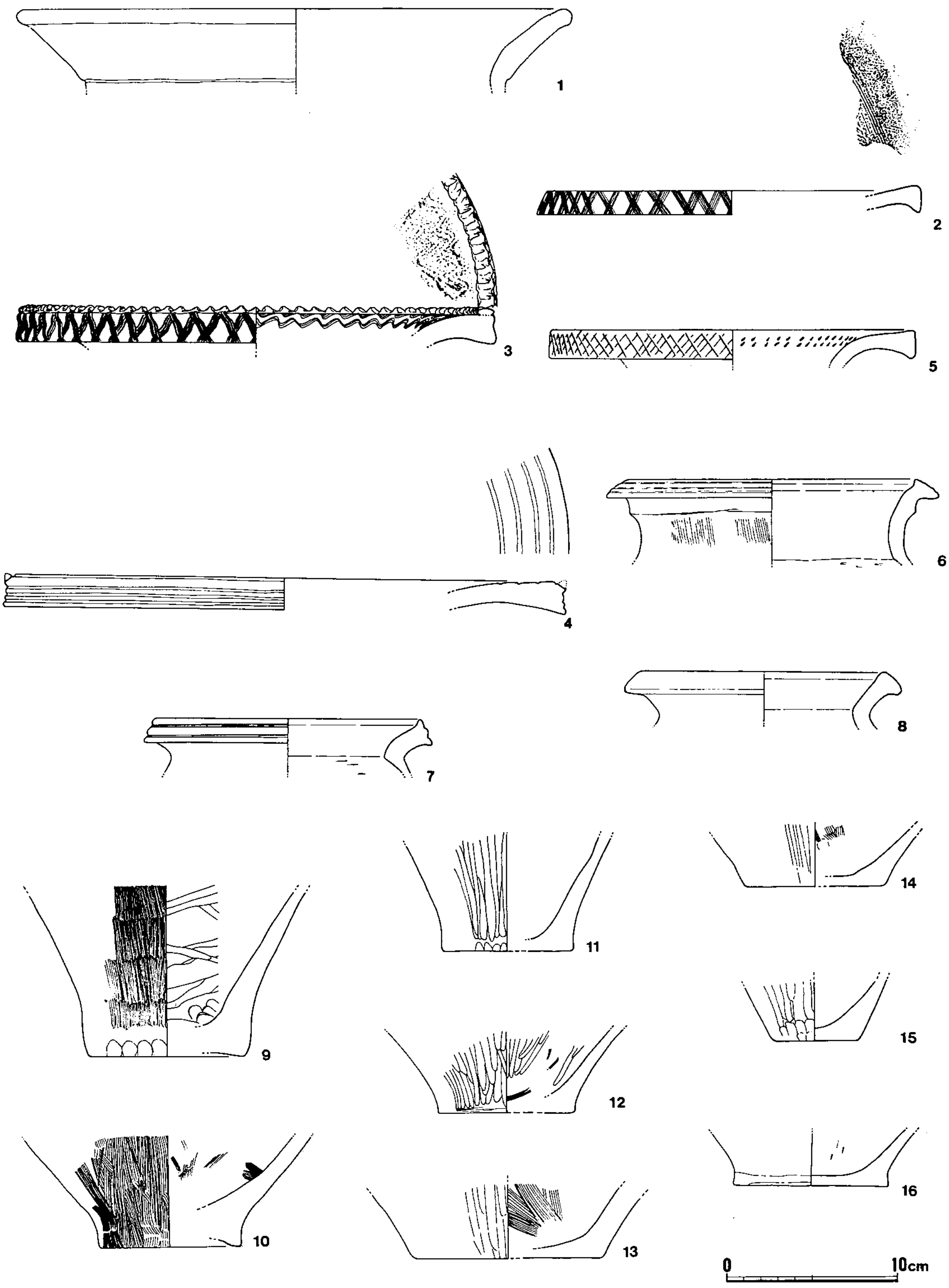
生墳丘墓の消長，古式土師器と後期末弥生土器の境界等重要な問題を内包するこの時期の土器型式の設定は，慎重な対応が必要と思われる．土器の様式的変遷観を矢野遺跡出土土器に即して確立し，それを他地域の編年と対比するという基本的原則的な作業が今後進められねばならないであろう．

註1)～4)　藤田憲司　「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」　『考古学雑誌』64－4　1979年

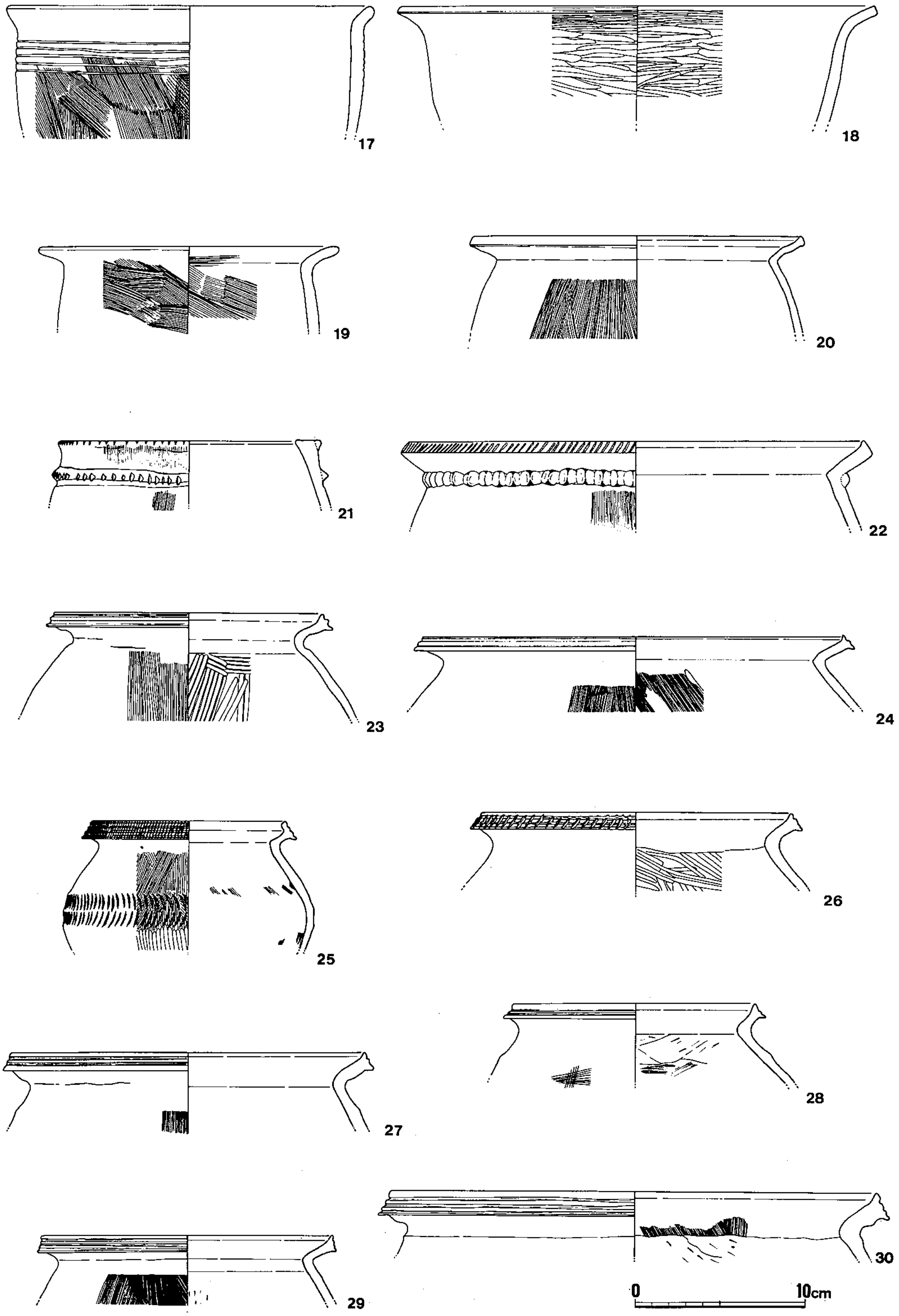
5)　島根県教育委員会　『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980年

6)　村上勇・川原和人　「出雲・原山遺跡の再検討―前期弥生土器を中心として―」　『島根県立博物館調査報告』第2冊，1979年

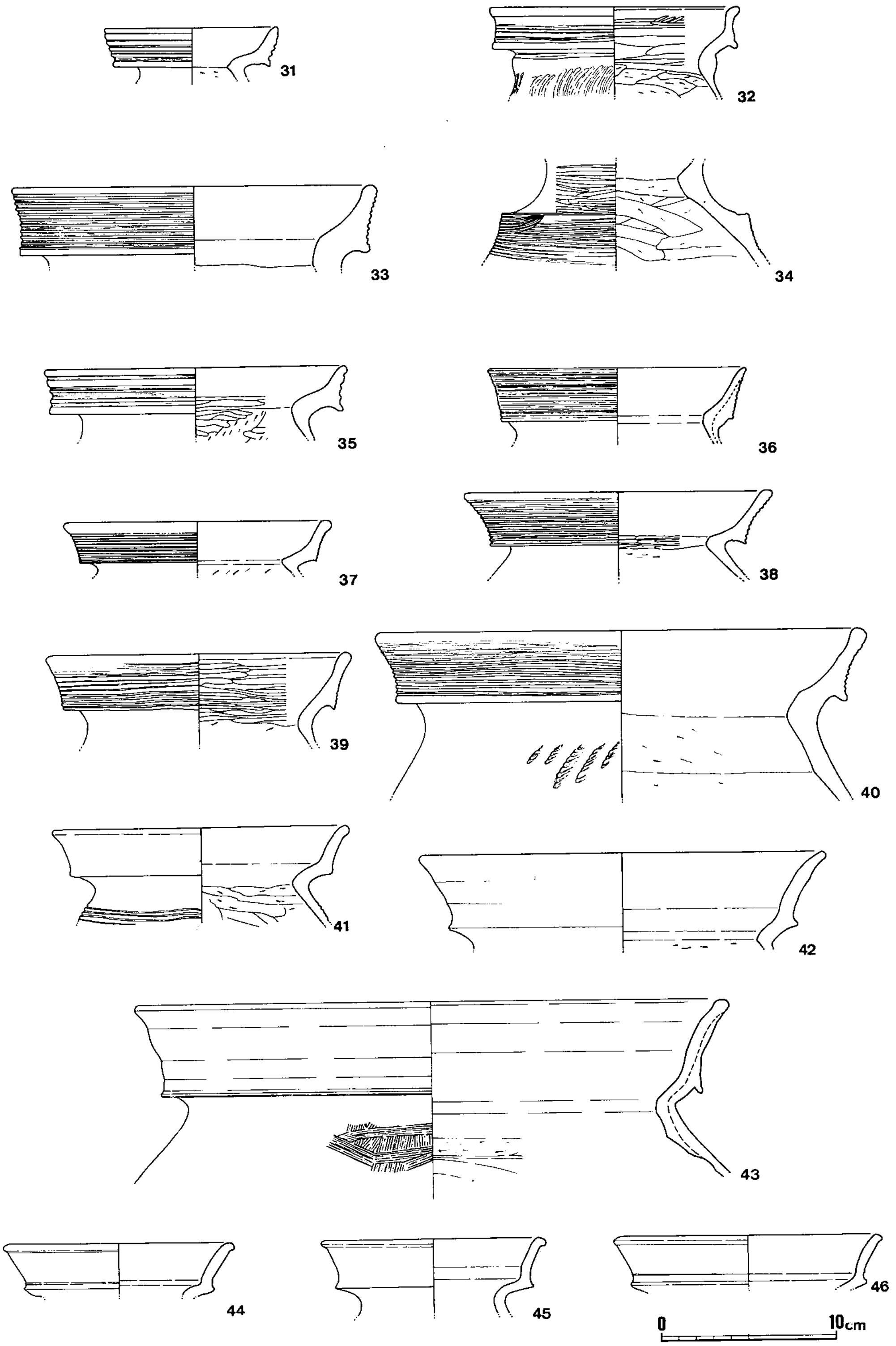
7)　出雲考古学研究会　「出雲平野の集落遺跡II―矢野遺跡とその周辺―」　『古代の出雲を考える』5，1986年



付編II図１　矢野遺跡第１地点出土土器実測図



付編II図2　矢野遺跡第1地点出土土器実測図



付編II図3　矢野遺跡第1地点出土土器実測図

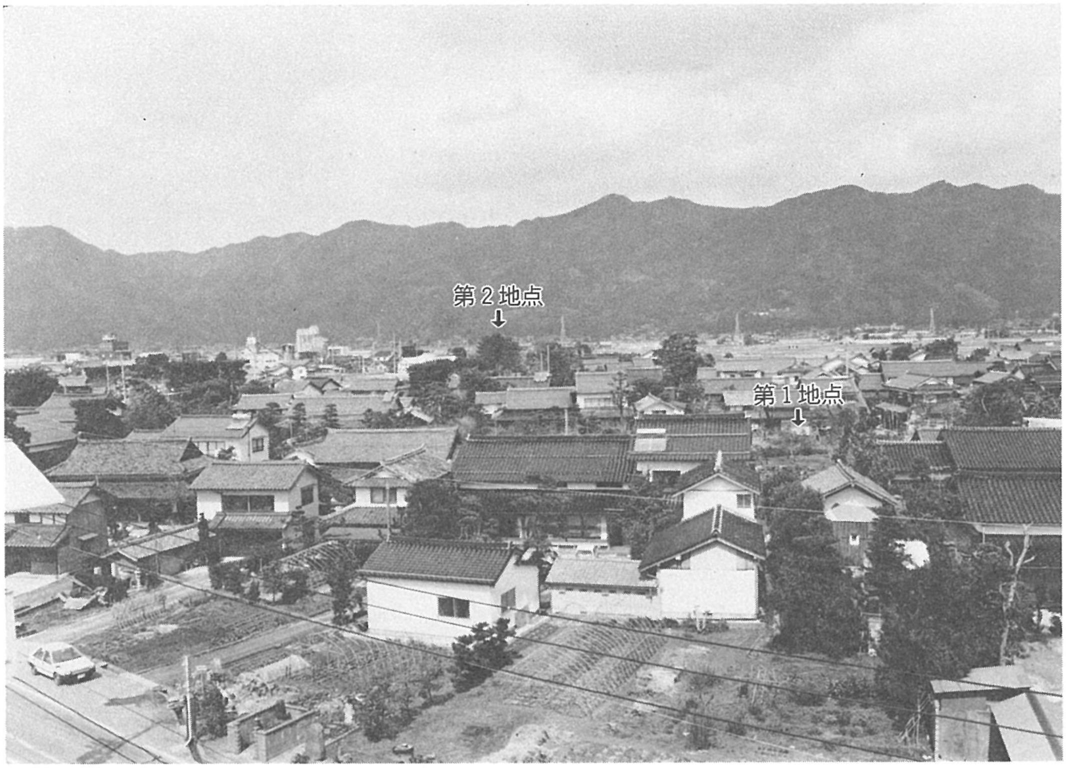
矢野遺跡第1地点出土土器（1953年調査）観察表

No.	器種	口径	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	胎土	焼成	色調
1	壺	32.6cm	口縁はゆるく外反・頸部に段をつける．		ハケメのちヨコ方向のヘラミガキ．口縁上端にはヨコナデのあともみられる．	全面ヨコ方向のヘラミガキ	石英等の砂粒を含む．	良好	黄白褐色
2	〃	22.8cm	朝顔形にひらく口縁である．	口縁端部の外面に4条単位の斜格子文をめぐらし，上面には外側から櫛状工具による9条の波状沈線文を施し，その内側には観察できる範囲で，4本の斜行沈線文がある．	ヨコナデ	ヨコナデ	細かい砂粒を含む．	良好	黒褐色
3	〃	28cm	〃	口縁端部外面に4本単位の斜格子文をめぐらし，上面には櫛状工具による波状文を施す．端部上面には指頭圧痕文帯をめぐらす．	ヨコナデ	ヨコナデ	1～2㎜前後の石英及び長石等を含む．	やや不良	淡黄褐色
4	〃	32.8cm	〃	口縁端部外面に3本の沈線，端部上面には4本の沈線を施す．	ヨコナデ 器面が風化している	ヨコナデ	密	良	明黄褐色
5	〃	21.4cm	〃	口縁端部外面にハケメ原体による斜格子文，口縁内部に刺突文を2列に施す．	ヨコナデ	ヨコナデ	密	良好	明黄灰色
6	〃	16.8cm	口縁部は厚いつくりで，口縁部は頸部から折れ曲がらず，大きく曲線を描いて開く形をなす．	口縁外面に3本の線を施し，のちにナデにより消す．	口縁部ヨコナデ 頸部タテ方向のハケメのちヨコナデ	ヨコナデ 頸部以下ヘラケズリ	密	良好	淡黄褐色
7	〃	15.6cm	頸部は「く」の字状に折れ，口縁部は肥厚する．	口縁部に2条のはっきりとした凹線を施す．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 頸部以下ヘラケズリ	密	良好	淡赤褐色
8	〃	14cm	口縁端部をまるくおさめる．		ヨコナデ	ヨコナデ	密	良好	淡黄灰色
9	甕？	底径 9cm	円盤状の粘土を貼り付けた様な底部中央わずかに内へくぼむ．		タテ方向のハケメの後，底面の回りは指頭圧痕	ヨコ方向のヘラミガキ，底面には指痕もみられる．	密	良	黒灰色
10	？	底径 8.4cm	底面がわずかに内へくぼむ．		タテ方向のハケメを全面に施す．	ヨコ方向タテ方向のハケメ	密	良好	明黄褐色
11	？	底径 7.4cm	—		タテ方向のヘラミガキを細かい単位を施したのち底のまわりにヨコナデを施す．		密	良好	灰白色
12	〃	底径 8cm			タテ方向のヘラミガキを施す．	ハケメのちタテ方向のヘラミガキ	密	良	明黄褐色

No.	器種	口径	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	胎土	焼成	色調
13		底径 11cm			なめらかでタテ方向のハケメのちヘラミガキ．底面の回りはナデを施す．	上へむかってのハケメ	密	良好	黒褐色
14		底径 8cm			風化していてはっきり単位は観察できないが，タテ方向のヘラミガキ	ハケメ	密	良好	明黄灰色
15		底径 5cm			タテ方向のヘラミガキよくみがかれている．		密	良好	明黄褐色
16		底径 8.9cm			風化していてはっきりしないがヨコナデを施しているものと思われる．	ハケメ	密	良好	灰白色
17	甕	21.8cm		頸部に5条のヘラ描き沈線をいれる．	口縁部ヨコナデ 胴部タテ方向のハケメ	風化がはげしく調整不明	石英等砂粒を多く含む．	やや不良	暗茶褐色 ススで黒変
18	浅鉢？	28cm	口縁部は短くゆるく外反し，胴部は底部にむかってゆるくすぼまる形状を示す．口縁端部は稜をなす．		ヨコ方向のヘラミガキ	ヨコ方向のヘラミガキ	密	良好	灰白色
19	甕	17.6cm	胴部がわずかに張りだす．		口縁部ヨコナデ 胴部ヨコ方向のハケメ	口縁部ヨコナデ 以下ヨコ方向のハケメ	粗砂粒を含む．	良	黄茶褐色
20	甕	19cm	口縁は肥厚せず，うすいつくりで，頸部は「く」の字状に折れる．		口縁部ヨコナデ，頸部以下タテ方向のハケメ	口縁部ヨコナデ，頸部以下こまかいナデ	密	良好	灰白色
21	甕	15.4cm	断面が三角形を呈する口縁で，上面は平面をなす．	口縁端部と頸部に突帯をはりつけ刻目をつける．	タテ方向のハケメのちミガキを施す． 口縁部はヨヨコナデ	単位は不明瞭	密	良好	淡赤褐色
22	甕	26.6cm	頸部は「く」の字状に折れ口縁はわずかに肥厚している．	口縁部にハケメ原体とみられるもので刻目をめぐらす．頸部に押圧を加えた粘土ひもをめぐらす．	口縁部ヨコナデ 以下タテ方向のハケメ	口縁部，頸部ヨコナデ	密	良好	灰白色
23	甕	15.8cm	口縁は若干肥厚させ，端部外面に平坦面をつくる．頸部は「く」の字状ににぶく折れ，口縁部と胴部とのつぎ合わせのあとがみられる．	口縁部端部外面に2条の凹線を施す．	口縁部ヨコナデ 以下ハケメ	口縁部頸部ヨコナデ 以下外面の調整とは異なるハケメ原体によるハケメ	密	良好	外：黒褐色 内：淡黄茶褐色
24	〃	25.6cm	口縁はうすいつくりで，端部はわずかに下にのばす．頸部はきつく，「く」の字状に折れる．	口縁端部外面に2条の凹線を施す．	口縁部頸部ヨコナデ以下タテ方向のハケメ．	口縁ヨコナデ 以下ハケメ	密	良好	灰白色

No.	器種	口径	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	胎土	焼成	色調
25	甕		口縁は内傾し，斜めに立ち上がる．頸部はきつく，「く」の字状に折れる．	口縁部外面に3本の凹線を施し，その後刃先のするどい工具で斜めの刻目をいれる． 胴部にハケメ原体で二段に刻目を入れる．	胴部ハケメ 胴下半部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 内面タテハケメのちヨコナデ	密 細かい砂粒を多く含む．	良好	明灰白色
26	〃	18cm	口縁部は若干肥厚し，頸部は「く」の字状に折れる．	口縁端部外面に4本の浅い凹線を施したのちハケメ原体で刻目をめぐらす．	口縁部，頸部ヨコナデ 以下ハケメ	口縁部ヨコナデ 以下ハケメ	細かい砂粒を多く含む．	良好	灰黒色
27	〃	22.8cm	〃	口縁部外面に2本の凹線を施す．	口縁部ヨコナデ． 以下残っている部分ではヨコナデしかみられない．	口縁部ヨコナデ 頸部ハケメのちヨコナデ 以下タテ方向のハケメ	密	良好	外　黒褐色 内　黄褐色
28	〃	14cm	〃	口縁部外面に2本の凹線を施す．	口縁部，頸部ヨコナデ． 胴部ヨコ方向のハケメ後タテ方向のハケメ．	口縁部ヨコナデ 以下ヘラケズリ	密	良好	赤茶褐色 黒変している
29	〃	17cm	〃	口縁部外面に3本の凹線を施す．	口縁部，頸部ヨコナデ 以下ハケメ．	口縁部ヨコナデ	0.5～1㎜の砂粒を多く含む．	良好	淡赤褐色
30	〃	28.4cm	口縁部は若干肥厚する．	口縁部外面に3本の凹線を施す．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 頸部タテ方向のハケメ 以下ヘラケズリ	微砂粒を多く含む．	良好	黒褐色
31	壺	9cm	口縁部はたちあがり，複合口縁となる．やや外反する，頸部はきつく屈折する．	凹線を5条施しているが，上部ははっきりせず凹凸はほとんどない．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 以下ヘラケズリ	密	良好	灰白色
32	壺	14.4cm	口縁部はほぼ垂直にたちあがり，上部端部はわずかに外反しまるくおさめる．頸部は，内筒状にやや長めになると思われる．	口縁部外面に凹線を施したあとがみられる．	口縁部凹線を施したのちヨコナデを施し，さらに下端部にはヨコ方向のミガキがみられる． 頸部タテ方向のハケメを施したのちミガキ．	口縁端部ヨコナデ 口縁部から頸部にかけてヨコ方向のヘラミガキ 以下ヘラケズリ	密	良好	明灰褐色
33	〃	14.8cm	口縁部たちあがり端部はまるくおさめる．	口縁部に10条の沈線を施す．	ヨコナデ	ヨコナデ	密	良好	黄褐色
34	器台	筒部の径7cm	脚部はゆるやかに外反する．	櫛状工具による沈線を施す．	筒部ヘラミガキ	ヘラケズリのちミガキ	密	良好	黄灰色
35	甕	17.2cm	頸部はゆるく，「く」の字状に曲がる．口縁部はやや外反ぎみにたちあがり，上下に拡大，端部はまるくおさめる．	口縁部外面に4本の凹線を施す．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ヨコ方向のヘラミガキ，以下上方向のヘラケズリ．	密	良好	灰白色

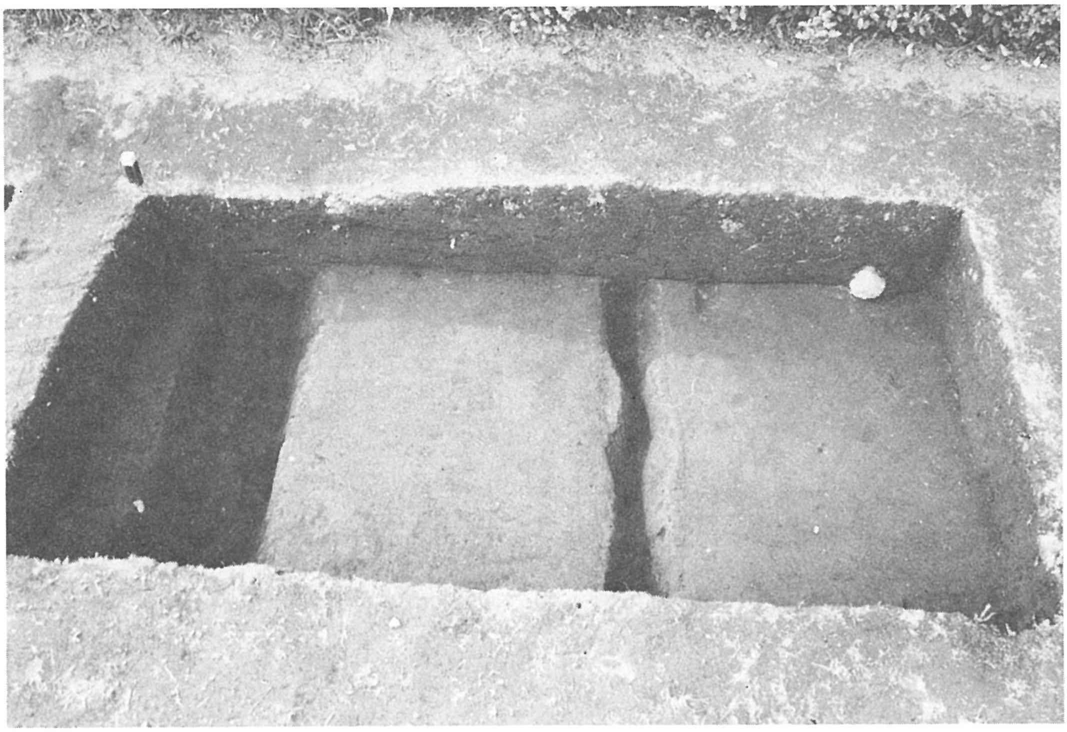
No.	器種	口径	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴		胎土	焼成	色調
					外面	内面			
36	甕	14.6cm	口縁部はたちあがり，頸部は「く」の字状に折れる．	口縁部外面に13本の沈線を施す．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 以下ヘラケズリ	細かな砂粒を多く含む．	良	淡黄褐色
37	〃	15.2cm	口縁部外反したちあがり，上端部は肥厚し丸くおさめる．	櫛状工具により10条の沈線を施しているが，そののちヨコナデ・ミガキを施し，凹凸ははっきりしない．	口縁部ヨコナデのちミガキ 頸部ヨコナデ	口縁部から頸部ヨコナデのちヨコ方向のミガキ 以下ヘラケズリ	0.5㎜ぐらいの砂粒を多く含む．	良	黒灰色
38	〃	17.4cm	口縁部はたちあがり，ゆるく外反する．頸部は「く」の字状に折れ曲がる．	櫛状工具により10条の沈線を施しているが，上の3条はヨコナデにより消されはっきりしない．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 頸部ヘラミガキ 以下ヘラケズリ	密	良	明灰褐色
39	〃	17.4cm	口縁部はたちあがり，ゆるく外反している．	櫛状工具による9条以上の沈線を施しているが上半部はヨコナデにより消されはっきりしない．	ヨコナデ 口縁部上部にはミガキも施されている．	口縁端部ヨコナデ 口縁部から頸部にかけてケズリのあとヨコ方向のミガキ 以下ヘラケズリ	密	良	黒褐色
40	〃	27.8cm	口縁部は外反してたちあがる．端部はまるくおさめ厚いつくりである．	口縁部に13条の沈線を施すが，上半部はヨコナデによって消される． 肩部には，櫛あるいは貝による施文を施す．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 頸部以下ヘラケズリのちナデ	密	良	赤褐色で部分的に黒みがかる
41	〃	17cm	口縁部はたちあがりゆるく外反，上端部はまるくおさめる．	頸部に残存しているだけで4条の沈線がみられる．	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 以下ヘラケズリ	密	良	灰白色
42	〃	23cm	頸部は「く」の字状に屈折し，口縁は外反し下方への突出はみられない．		ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 以下ヘラケズリ	1～2㎜の砂粒を多く含む．	良	赤褐色
43	〃	34cm	口縁部はたちあがりゆるく外反する．上端部はまるくおさめ，下端部が突出する．		口縁部ヨコナデ 頸部以下タテ方向のハケメのちヨコ方向のハケメ・	口縁部ヨコナデ 以下ヘラケズリ	1㎜前後の石英，長石を多く含む．	良	黄褐色
44	〃	13.2cm	口縁部たちあがり，端部は丸くおさめる．		ヨコナデ	ヨコナデ	密	良	灰白色
45	〃	12.4cm	口縁部たちあがり，口縁上端部を突出させ上面に平坦面をもつ．下端部はヨコ方向に突出する．		ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒を含む．	良	外　灰白色 　　黒斑 内　淡赤褐色
46	〃	14.6cm	口縁部たちあがり，口縁上端部はまるくおさめる．		ヨコナデ	ヨコナデ	密	良	灰白色



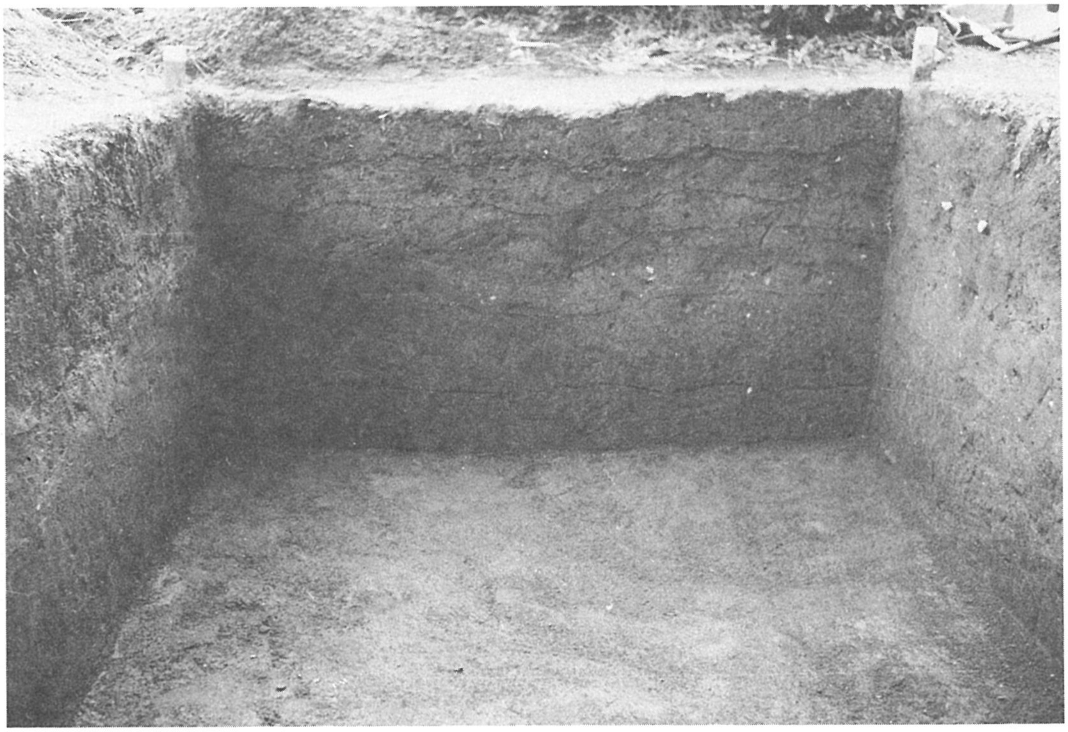
矢　　野　　遺　　跡　（南より）

矢野遺跡第２地点　（八野神社付近遺跡）

Ａ地点第Ｉトレンチ全景　（南より）

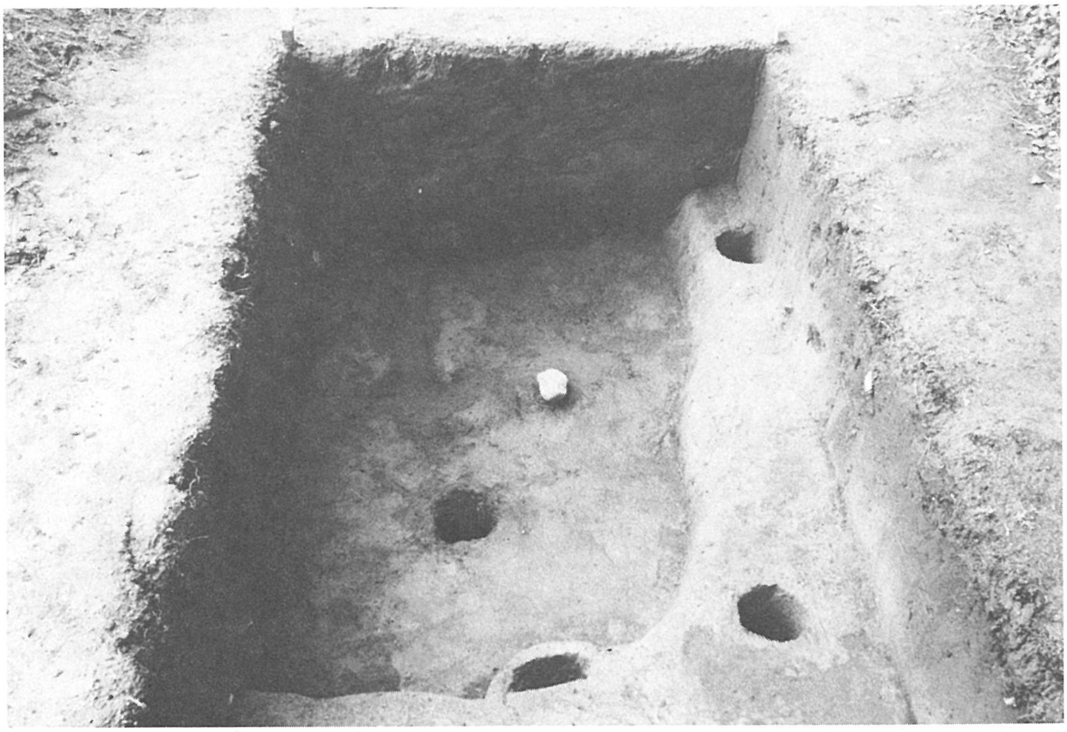


Ａ地点第Ⅰトレンチ２区の溝状遺構　（東から）



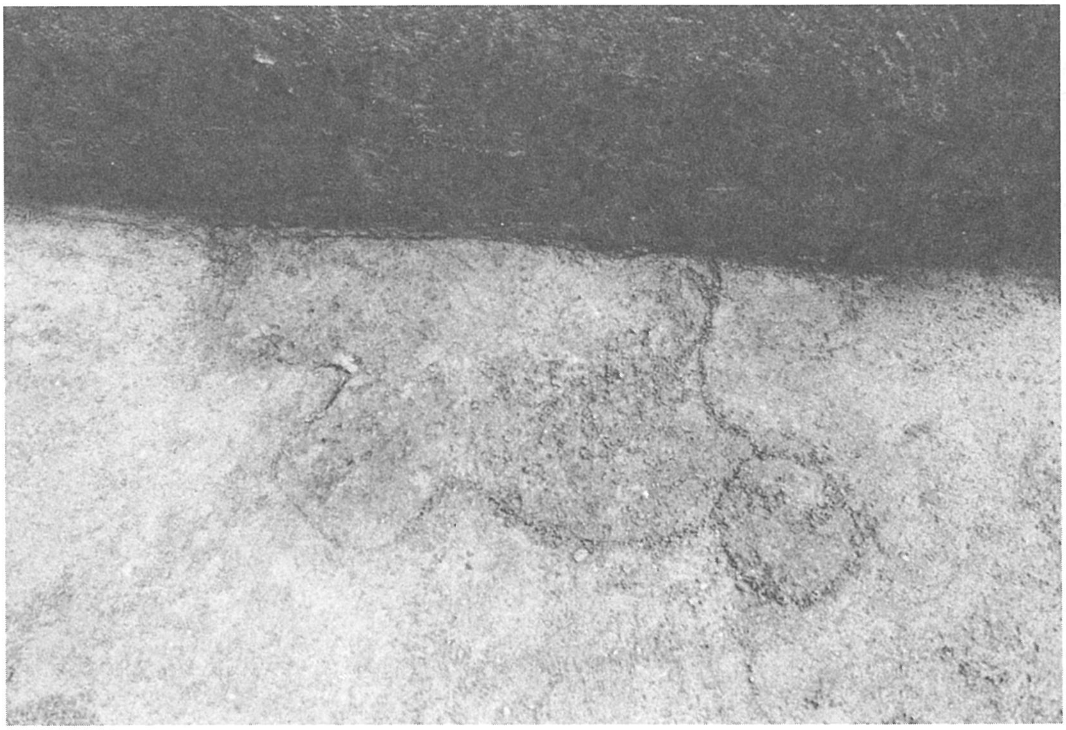
Ａ地点第Ⅰトレンチ１区南壁断面

A地点第Ⅰトレンチ３区の竪穴住居址



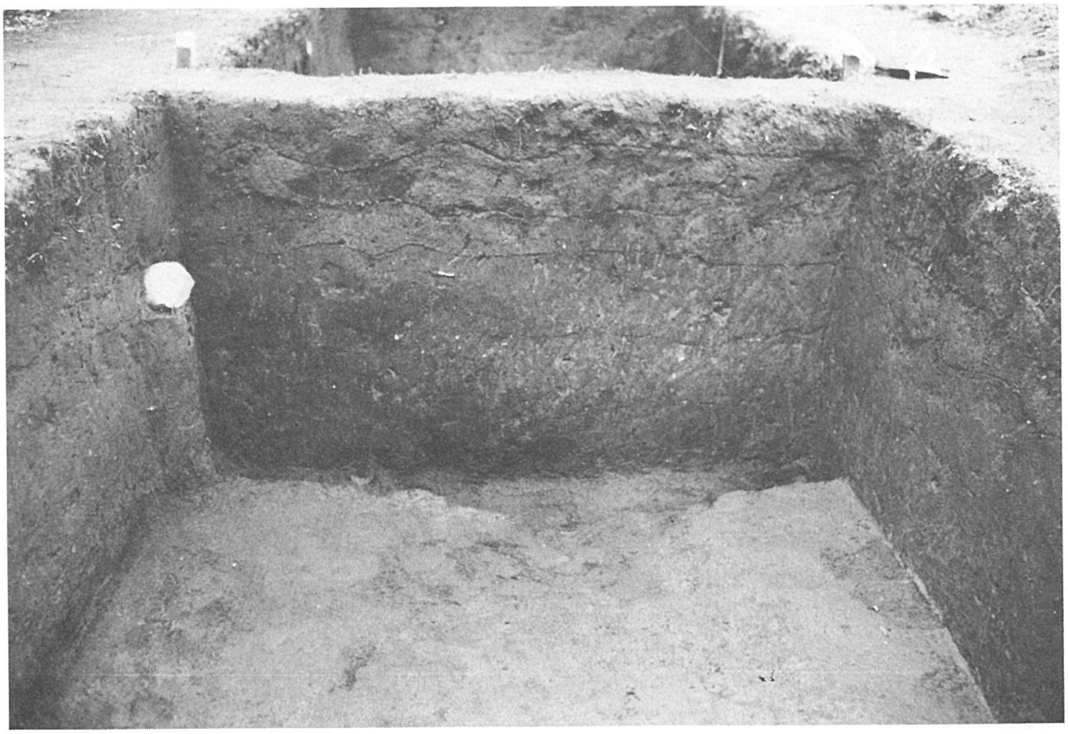
A地点第Ⅰトレンチ３区竪穴住居址

Ａ地点第Ｉトレンチ３区東壁断面



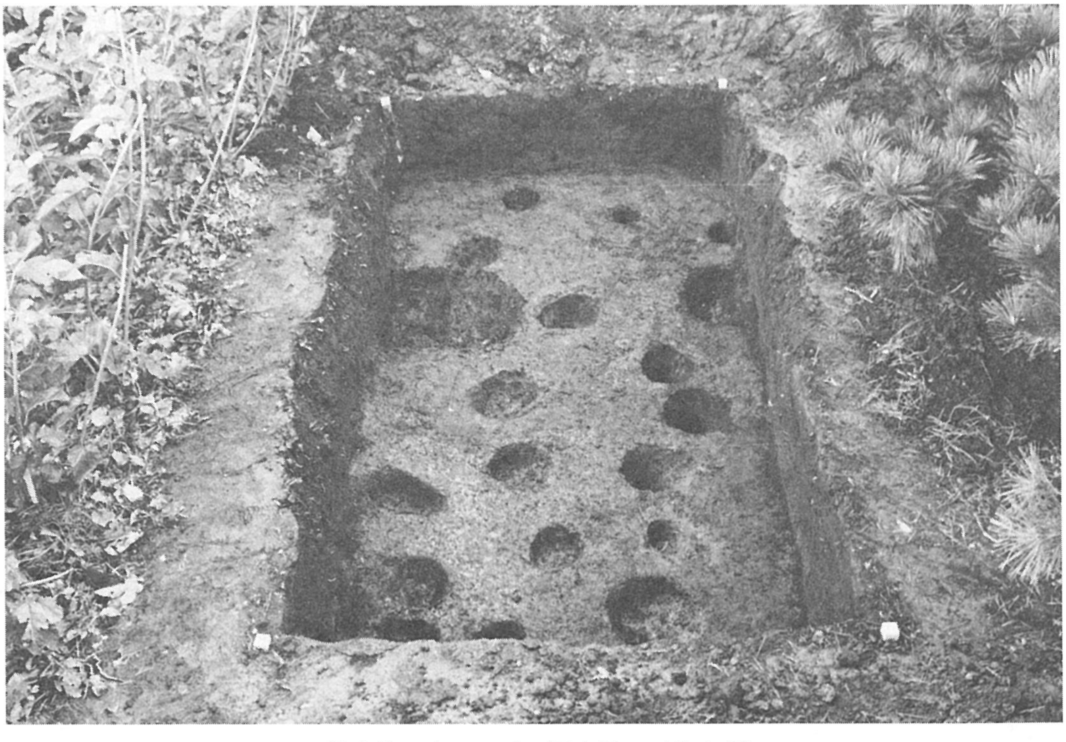
Ａ地点第Ｉトレンチ２区砂層上面の遺構

A地点第Iトレンチ2区土器出土状態　（黒褐色土層下部）

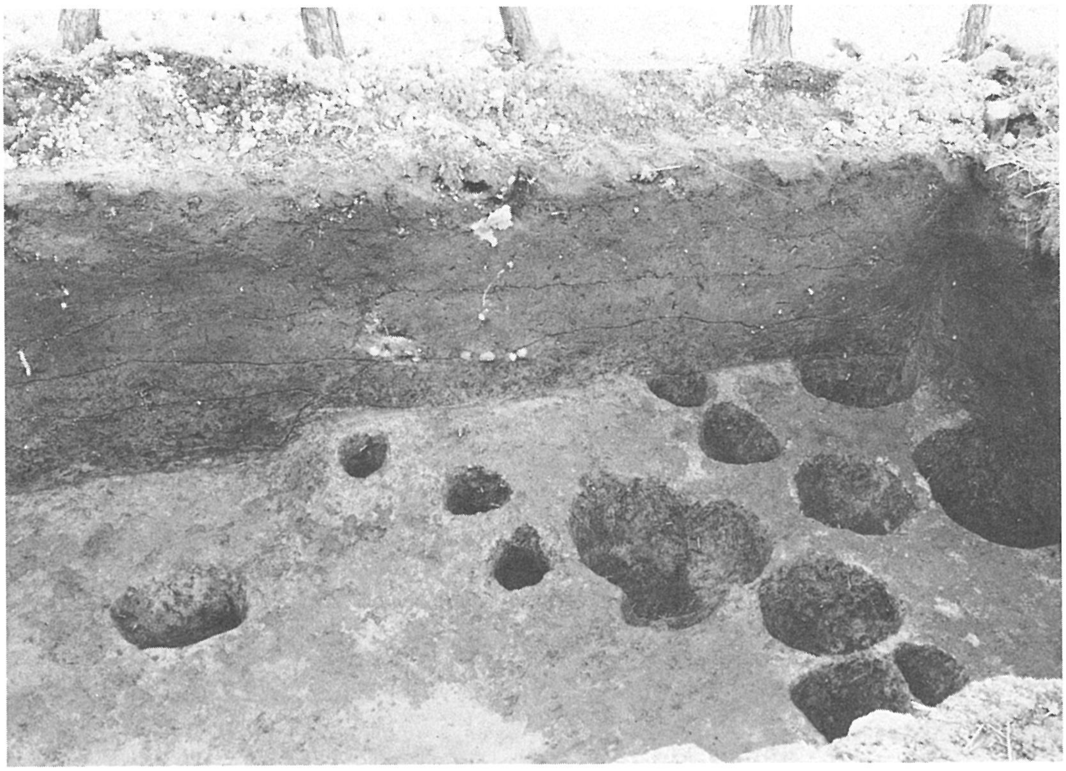


A地点第Iトレンチ2区北壁断面

A地点第Ⅰトレンチ１区北壁断面

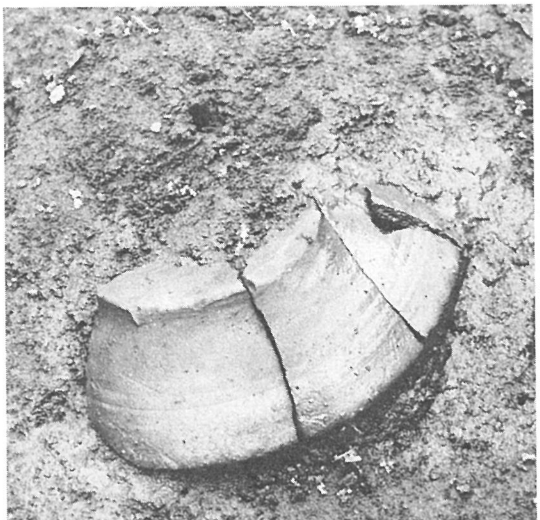


B地点第Ⅰトレンチ１区全景　（北より）

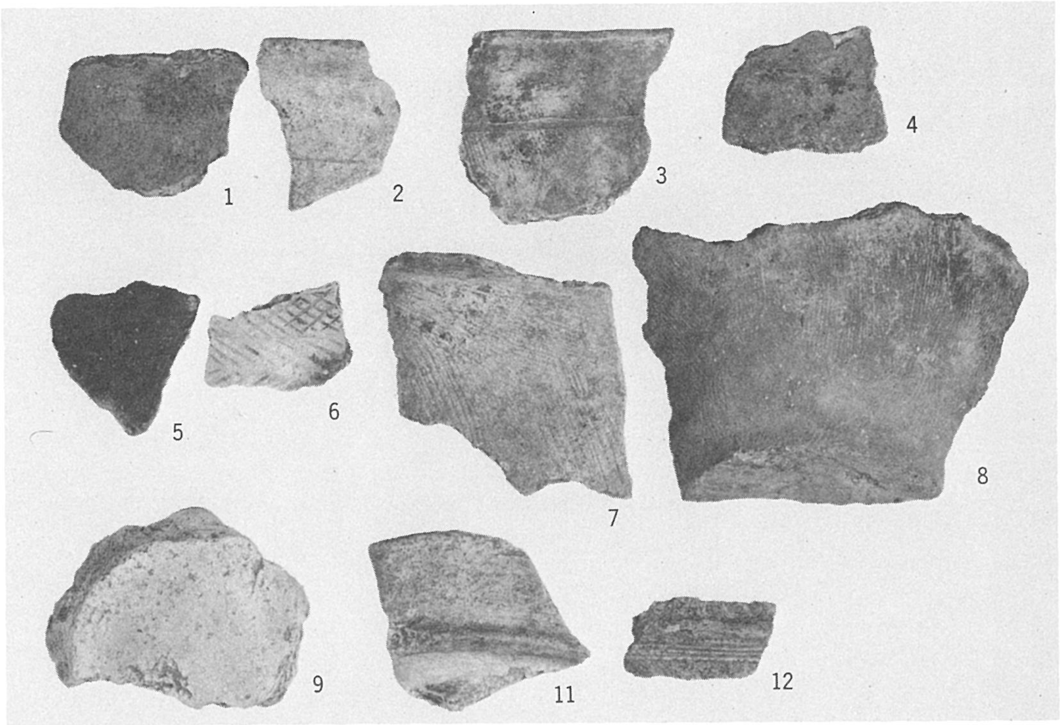


B地点第Ｉトレンチ遺構出土状態及び西壁断面

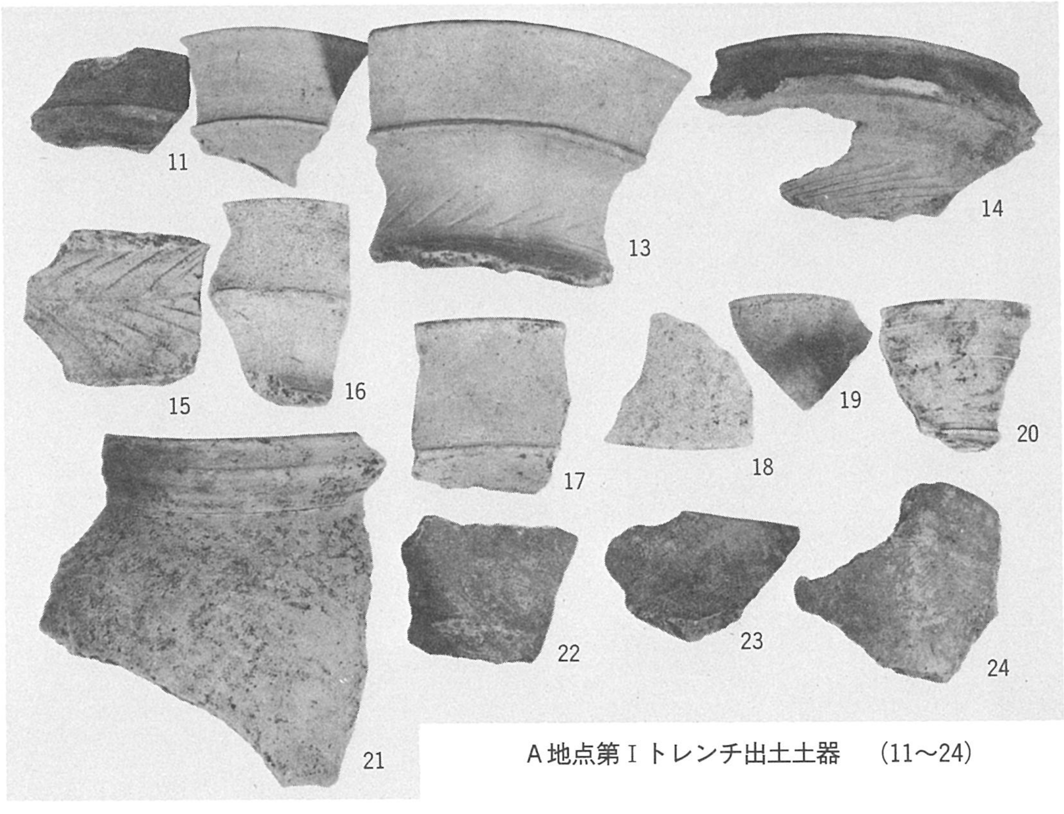
B地点第Ｉトレンチ１区土器（坩）出土状態



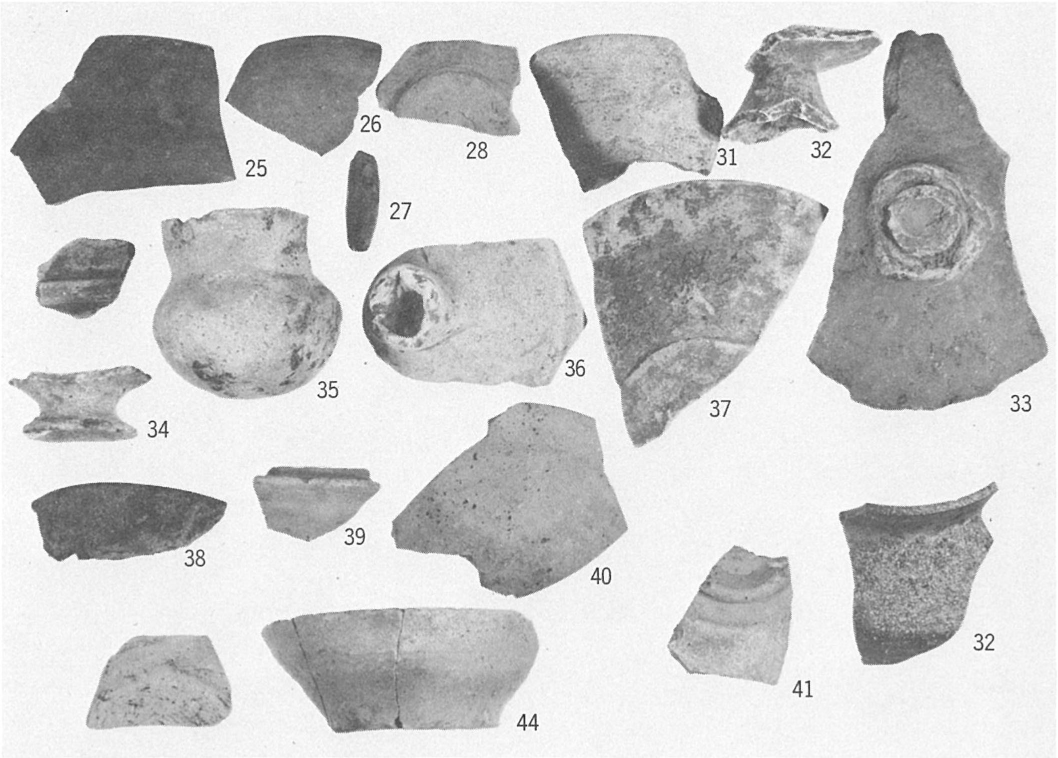
B地点第Ｉトレンチ２区土師質土器出土状態

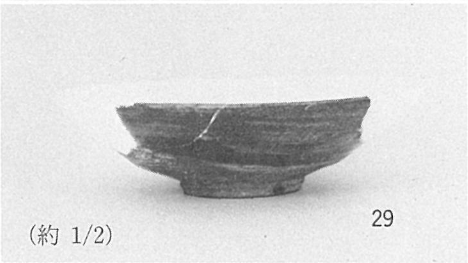


A地点第Ⅰトレンチ出土土器　（1～12）



A地点第Ⅰトレンチ出土土器　（11～24）





A ・ B 地点出土土器
(25～29・Ａ地点第Ｉトレンチ，30～33・Ａ地点表採，3～44・Ｂ地点第Ｉトレンチ)